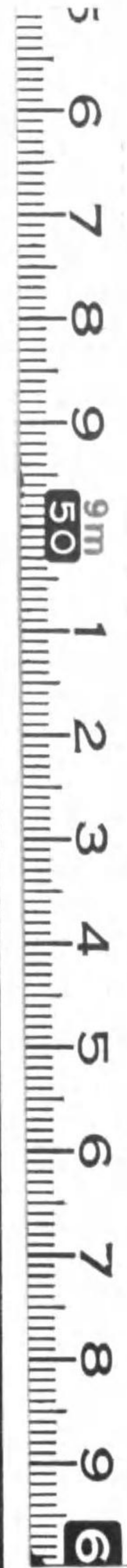


263. 2-459



1200501352568

263.2  
9



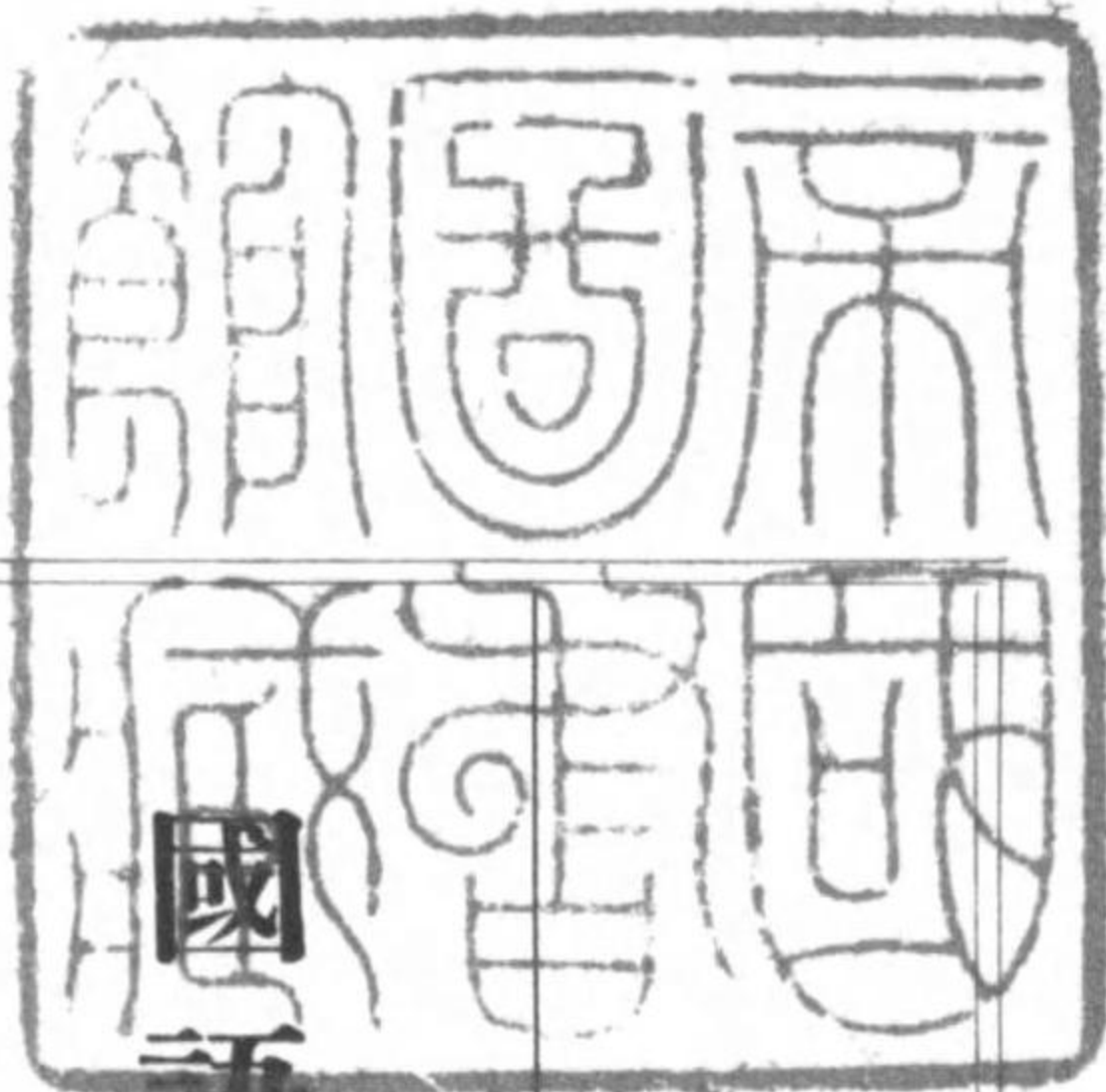
始





637





國語教育易行道





249.2 459

序

此の書を書く爲に、三月三十日の夜玉川温泉に行きました。三十一日、四月一日、二日は「小學國語讀本と教壇」の手入をして、三日の朝その原稿を東京へ送りました。この日青山君が訪ねてくれました。二人で晝食に一杯飲んで、午後は字を書散らして遊びました。清遊といふのはかうした事でせう。四日青山君が歸つて後、私は此の書の第一頁を書いてみました。どうした事か、想が全く涸れてゐます。こんな筈はないと、考へれば考へるほど、想はすぐんでしまひます。果は廣い枯野の一端に立つてゐるやうな感さへ伴つて、自分ではどうにもならなくなりました。國語教育易行道、芦田惠之助著と書いては、幾度引裂いたか知れませぬ。その中に枯野が野火に燒盡されて、あとは灰燼の物凄さを見るやうな氣持になりました。これでは筆執るといふことは罪惡だと思ひ



はじめました。破壊したる自己を見る感じでした。同志に對する食言をつらく思ひました。かうなつては、落着いて座することすら出来なくて、たゞ部屋の中を歩きまはりました。自己の滅亡を思つた時人の狂ひ行く様をまざく、と見る感じがしました。

その中に坐つてみようと、いふ心がきざしました。「坐れ」と岡田先生の命じたまふ御聲を聞くやうでした。端坐瞑目一時間餘にして、眠氣を催しましたからそのまゝ床にはいつて熟睡しました。翌朝四時に起きてみると、颯風一過の後のやうでした。試みに鉛筆を執つてみると、想は絲を繰るやうに流れて出ます。神の助けかと感じました。五日には「緒言」を書きあげました。六日には「教壇行脚」に進みました。「國語教育易行道」に入つては、存外明るい所もあり、又存外暗い所もあつて、驚きもし、苦しみも致しました。百二十字詰の原稿用紙七十二枚がレコードでした。完全に日曜は遊びました。東京に歸つて二三日教壇に立つて「易行道の行者に」

と「結語」を書きました。五月一日東京出發の晩までには、手入が終らなくて、川之江までの車中で筆を加へました。今高知でこの序文を書いてゐるので、この著は私の約一箇月の所産です。

私はこの著をなすについて、用意の甚だしく缺けてゐたことを告白致します。同時に同志にお詫び申し上げます。私が十年行脚の足跡と、その間に養ひ得た識見を書くのだから、何の用意もないと思つたことが、大なる誤りでした。しかし不用意の妙趣がないでもありません。そはとにかくに、この著は國語教育易行道の序説といふべきもので、細説は他日に譲る外はありません。易行の一道を擧揚することは、一日をゆるうする事が出来ませんから、思ひきつて發行することに致しました。

私は執筆中、度々遺書を認める感の浮んだことがありました。千數百年來踏襲して來た、外に目のつく教育を、内に切換へようとするのです。古來學徒にすら、自救不了の者が少くありません。



私は之を地上一ミリの大衆に施して、その境に安んじ、その生を樂しむ者たらしめようといふのです。初等教育はこの一點を凝視して、まつしぐらに進むべきだと思ひます。私の微力、到底その器でないことは言ふまでもありません。しかし私以後の同志同行の徒が、悉く無力であるとは、誰が斷言し得ませう。私は之を念じて、心強い氣持で、この遺書を書いたのです。私もなほ數年はもの用に立ちませう。何とかして同志と共に、易行の一道を興隆せしめなかつたら、國家の將來も憂慮に堪へざるものがあると思ひます。

昭和十年五月七日

於高知大松閣 芦田惠之助

# 國語教育易行道

## 目次

自序	一
一 緒言	一
二 教壇行脚	三
三 國語教育易行道	六
四 讀方	九
五 綴方	三七
六 易行道の行者に	三八
七 結語	三〇

目次



皆讀 皆書  
皆話 皆綴

これがむづかしいやうな國語教育が、我が國にあつてはなりません。教育をうけないものならば知らず、苟も義務教育をうけたものが、皆讀・皆書・皆話・皆綴が出来ないとしたら、小學教育者は相等責任を感じてよいと思ひます。その原因を兒童の環境に歸したり、兒童の天賦に歸したりして、淡き安心を貪るやうなことは、小學教師に決してあつてはならないことです。是は是、非は非、押すべきは押し、改むべきは改め、堂々大道を濶歩する底の丈夫的覺悟がなくてはなりません。國語教育が興隆しないで、何の國民教育だと思ひます。(昭和十年五月八日於高知大松閣)

## 國語教育易行道

芦田惠之助著

### 緒言

私は教壇行脚十周年の記念として、この書を書きます。旅に明かし旅に暮したこの十年、見聞し、體驗したことが可なりに澤山ございます。それを忠實に書いてみたいと思ひますが、いかに次第して、いかに表現すればよいか、私には一大問題です。兒童の綴方を見ても、自分が一人で、或は友だち二三人で、經驗したことを綴る場合には、想それ自體に順序がありますから、比較的締つたものを書きますが、村の祭だの、運動會だのといふ総合的のも





のになると、その表現が多く部分的になることは、勢止むを得ない事であります。かうした惱は、兒童ばかりではありません。私の今が全くそれです。幾度目次を作つてみても、順序を工夫してみても、さて筆を執つてみると、部分的のきらひがあり、何處かに縛られた感が致します。そこで私は、思ひ出づるまゝに書いていかう、それが最も自然である」と考へました。したがつて、條理整然とはまゐりません。或は重要な事柄を逸したり、或は柄にもない處で、力んでみたりすることもございませう。それは頭のわるいものに許された自由さだと、お見許しを願ひます。

手許にある教壇日誌第一卷——昭和五年十月越後新津始、これより以前は全部大學ノートに記しました。これからは全部判取帳に毛筆書、現在には既に四十七卷になつてゐます——を開いて見ると、臺北で土性視學官に聞いて書きつけておいた、船田定治郎氏の直話といふのがあります。私は之

船田定治郎氏

をこの書の卷頭に書いてみたいと思ひます。

船田定治郎氏は山形縣師範學校の出身で、終始一貫、太巴壠公學校の蕃童教育に盡瘁して下さつた方でありませう。太巴壠といふのは臺灣の東海岸、花蓮港から約二十里の處にあつて、鐵道沿線から入込むこと一里半、極めて交通不便な所です。開校當時から船田さんの御盡力と誠意は蕃人もよく之を理解して、大正八年には既に十二學級の大きな蕃童公學校となりました。今船田さんの直話であるといふを次に書きつけませう。

花蓮港より一里許の所に七脚川といふ大蕃社がありました。とかく反抗の傾を持つてゐたので、總督府は大討伐を行つて、蕃社を一掃してしまひました。そのあとに建設されたのが、今の模範移民村として名高い吉野村です。

ところが討漏らされた七脚川の殘黨は、一部は中央山脈に走り、一部は



海岸山脈に逃込みました。かうなると、蕃人のならひとして、事の理非を顧みるいとまなく、内地人を見ることさながら仇敵のごとく、襲撃の餘地あるところには、細大もらさず之を試みて、復讐の快をむさほつたものでありました。

我が太巴壟公學校は、海岸山脈に近く、かつ太巴壟蕃社以外にありませんので、七脚川殘黨に取つては好箇の目標でありました。ことに内地人である私は、彼等にとつては、屠らねばならぬ一人でした。

ある日太巴壟の老蕃——蕃社に於ける有志者といふやうな者——が來て、眞心こめていひますには、「この頃夜になると、しきりに犬が鳴きます。その鳴聲が極めてよくありません。多分先生を狙ふ者があるのだと思ひます。しばらく宿舍を蕃社内に移して、事のをさまるのを待つて下さい。萬一の事があつては仕様がありません」といひました。私はその厚

意のある所を十分に察しましたけれども、蕃人を御するにはこゝが大事の所だと考へました。若し今彼が言ふなりになるとしたら、到底彼等を卒る事が出来ないと、一死を賭する覺悟ではつきりと斷りました。「君等の厚意は深く謝する。が、我は此處を去らない。我は太巴壟公學校の校長である。日本男子だ。此處に一口の日本刀がある。この一刀に對しても七脚川の殘黨位を恐れてよいものか」といひました。

しかしさうは言つてみたものの、夜に入つては氣のせるか、寂しさが身にしむやうでした。全く鬼氣人にせまるの感がしました。家の周圍に人の氣配がするやうにも思ひました。犬もしきりに鳴きます。足音さへも時々きこえるやうです。日本刀を引寄せて、夜を徹して警戒してゐても、何の事もありません。朝になつても少しもかはつた事がありませんでした。かうしたことが一週間あまりつゞいて、私は全く神經衰弱に



なつてしまふかと思ひました。氣味の悪さといつたら、到底口にははれるやうな事ではありませんでした。

十日餘りにして、さきの老蕃が來ました。「先生御安心なさい。七脚川は去りました。實は先生にお知らせしないで、蕃社の青年たちが毎夜先生を保護してゐたのです。先生もおきよになつて、さぞ氣味わるく思はれたでせうが、足音のしたのは青年たちが家の周圍を固めてゐたからです。もし先生にそれをお知らせしたら、先生は必ずお斷りになると思つたからです」といひました。

私は年久しく太巴壘の蕃童を教育して、人に語るべき何事をも持たないものです。が、この一事は思ひ出づる毎に、救はない子に救はれたといふ感じで、一面には申譯がないやうにも思ひます。

船田さんは昭和五年かの地でなくなつて、翌年の二月一日臺北郊外の芝

山殿神社に合祀されました。芝山殿神社といふのは、臺灣に於ける教育者の靖國神社で、毎年二月一日が祭日です。この日は全島からの參拜者が多數、實に盛大な祭典が舉行されます。私も丁度船田さんの合祀された昭和六年に參拜をとけまして、かくてこそ教育も自ら興隆することだらうとしてみじめ感じたことがありました。

土性視學官はこの程——昭和五年十月二十七日の朝——勃發した霧社事件を語つて、今迄に蕃人が學校を襲撃したことは稀有のこと、教職員に危害を加へたことは殆どないといつてもよい位でした。私は此の頃しきりに「教育は進んで精神は退くものかと考へさせられます」と結語せられました。私の常に「精神は精神で培ふべきものだ」といふ言に全く一致するお言葉でありましたので、私はひそかに、何處にもかうした歎聲を聴くことかと、甚だ心淋しく感じました。



私は最近に極めて面白い事實を見ました。私は小學國語讀本の新しい巻が出るたびに、必ず愛媛縣の川之江に行きます。それは同地の古田擴君に指導をうけて、『小學國語讀本と教壇』を書くためです。この程——昭和十年三月七日より二十二日まで——も巻五を携へて行つてまゐりました。その間の出来事なのです。

## 公益神社

或る朝、私の間借をしてゐる家から、古田君の家へ食事に出かけました。すると街路を小學生が三四人で掃いてゐました。見るとその中に古田君の長男東朔坊がゐました。東朔坊は尋常の三年生、しかし四つ五つの頃から、私とは至つて親しい間柄です。私はその傍を通りぬける時、「お早う。美化作業かね」と申しましたが、その言葉は通じないやうでした。私は心に「これがいつまで続くかな」と思ひました。翌朝は掃寄せた馬糞を塵取で取つてゐました。その翌日は新しい竹箒を一本加へて、にこ／＼しながら掃い

てゐました。東朔坊が母にいつたさうです。「おかあさん、私が朝起きなかつたら、しつぱたいでもよいから起して下さい」と。彼等はその作業を公益といつてゐます。それをやり通す一念から、母へかう頼んだのでせう。

私は面白いことだとは思ひながら、わざと是ともいはず、非ともいはず、唯だまつて見てをりました。二三日の後、ある老婆がその街路に沿つた麥畑を耕してゐました。畑の中の石を掘出しては、悉く街路に投上げてゐました。私は心なき事だとは思ひましたが、それよりも翌朝の公益に彼等が之を如何に處置するかがよい課題であると思ひました。翌朝の公益は果して投上げた畑へそれを全部掃落して、路沿ひのうねには大小の石がごろごろとしてゐました。私は之を見て、「おい公益」といふと、數人が私の周圍に集りました。「今朝は石が道に出てるたらうが、公益はうなづきました。」どうした「掃落した」おばあさんが來てまた投上げるぞ、公益は無言。「それは公益



といふものではない。よい事を教へてやる。深い穴を掘つてさ。再び石が出て来られない様に埋めてしまふのだ」そこで私は穴の大きさ深さをよく指圖しました。之を聴いてゐた最年長は、私の言を復唱してゐました。手眞似までして聴入つてゐました。この時復唱は確實なる理會への有力なる方法だと氣が付きました。午後には公益連中が汗になつて、それを實行してゐました。

それから二三日たつて、私は古田君の家の前庭に、公益神社を見出ししました。それはかの公益連中が、手工で社殿を作り、鳥居も作つて、御神體には東朔坊の母の作つたお守袋を安置してゐました。公益神社の起原は、街路掃除以前であつたかも知れませんが、私の見付けたのは十七八日頃でした。私には子供等の動きが信仰に觸れて行くのがいよゝ面白くてたまらなくなりました。そこで私は公益神社氏子中として、金を少々封筒に入れて

與へました。するとそれを神前にそなへて、大騒だつたといふことです。

二十日であつたか、寒い日でした。私の借りてゐる部屋に、大勢の子供がはいつて來ました。私は原稿を書いてゐるので、見向もしないでゐますと、後の方がひつそりしてしまひました。はて、何をしはじめたかとふりむいて驚きました。氏子十二人が年齢順に端座してゐるではありませんせんか。私も知らず識らず居すまひを正しました。すると信徒總代格の誰かが「有難うございました」とお禮を述べてお辭儀をすると、皆手をついて並大名式に一禮をしました。さうして「先生のお出でた時、春秋二度の皇靈祭の日に公益神社のおまつりをします」といひました。相當冗談をいひ得る私も、この生眞面目な一本調子にむかつては、一口も口がきけませんでした。そこで私が東朔坊に「公益神社の氏子の名前を書いてくれ」と頼んでおいたら、書いて出したのがこれです。



六年	船田昌春(十四)
五年	石村茂(十三)
五年	長野廣次(十三)
五年	高橋利平(十二)
四年	船田金也(十二)
三年	古田東朔(十一)
三年	大西弘(十一)
三年	徳永悦郎(十二)
二年	古田明子(十)
一年	古田足日(九)
	古田吟三(七)
	古田普行(六)

東朔記

春季皇靈祭の日、春の大祭を舉行してゐました。太鼓・ハーモニカ、それはそれは賑やかなことでした。暫くして東朔坊が泣いてゐました。その理由を聞くと、他町の之を嫉視する仲間が、公益神社をこはしに来るとの風聞があつた爲でした。すると古田君が「こわしに來たら防がんかい。泣くちうことあるか」といつてゐました。

事實はこれだけです。けれどもこの中には單純には考へられない教育の問題をふくんでゐます。教育史にあかるい先生でも、手にあひかねるものがあるやうに思ひます。世相一切がこの事實に織込まれてゐることを思ふ時、私の眼があまりにも真相を見抜く力の乏しいことを悲しみます。けれども私どもの四周には、常にかうした活教育事實の生滅してゐることを有難い事に思ひます。



私はこの十年間に高等小學讀本卷二エジプトの遺蹟を取扱つたことが三四回あります。私はいつも取扱つた後に、極めて大問題を投掛けられた感がして、時には茫然とする事さへありました。私はこの文章が今の世に、何を暗示してゐるかを思ふ時、私どもの脚下に、おそるべきものの芽生えつつあることを思はずにはゐられませんでした。

## エジプトの遺蹟

エジプトは五千年の昔に於て、つとに文化の發達著しく、國勢頗る盛なりしが、其の後しばしば外國の侵略をかうむりて、興亡幾變遷、當時の都市は悉く荒廢に歸したり。然れども今尙沙漠の間に存する遺蹟を見れば、其の規模の大なる、實に人目を驚かしむるに足るものあり。今其の最も著名なるもの二三を記さん。

エジプト國現時の首府カイロ市の附近に至れば、處々に雲をしのぎてそびゆる三角塔を見るべし。これ即ち有名なるピラミットなり。何れも巨石を積重ねて造りたるものにして、如何にして之を積上げたるか、今日尙建築學者の疑問とする所なり。其の最も壯大なるものは、高さ約百

四十七メートル、底面の一邊長さ各約二百三十メートル、底面積約五萬三千平方メートルの廣きに達せり。或史家の説によれば、此の巨大なる塔を建つるには、毎年洪水の季節三箇月間十萬人の工夫を役使して、二十年餘の長年月を要したるなりといふ。ピラミットは國王及び王族の墳墓にして、内部に室房あり、壯大なる石棺を安置せり。此の石棺中には數千年の星霜を経て尙朽ちざるミイラあり。

オペリスクは宮殿・寺院等の門前に建てたる石碑なり。細長き四角の柱にして、其の上部は尖端に終り、高さものは三十メートルを超ゆ。皆一本の石にして、多くは花崗岩を用ひ、鏡の如く磨きたる四面にはエジプト特有の文字を彫刻せり。總べて國家の大事、英雄の偉績等を傳ふるために建設せるものなるを以て、エジプト太古の歴史を研究するに最も必要なるものなり。

エジプト文字の研究は早くより試みられたれども、十分に讀解く事能はざりしが、西曆一千七百九十九年三様の文字にて彫刻せる石を發見せしに、其の一はギリシヤ文字なりしを以て、之と對照して始めて讀得るに至れり。

體と四肢とは獅子をかたどり、頭部は人の形を具へたる異様なる大石像あり。之をスフィンクスと稱す。其の大なるものは、頭部のみにても十メートルに及べり。一對つつ相向ひて列をなすを常とす。けだし宮殿・寺院・墳墓等の裝飾物なるべし。大ピラミットの近傍にあるもの殊に雄



大なり。是等のスフィンクス中には、吹寄せられたる砂中に埋没して、今は唯頭部のみ現れたるものあり。

心をしづめてこの文章を読んでみて下さい。尋常高等を通じて、四百に近い文章中、この課程、謎の多くを含んでゐるものがあるでせうか。エジプトの古代文化を傳へてゐるものだとは誰もいふ所でせうが、私はそんなことでは満足出来ません。エジプト人の思惟したことがうかゞはれるではないかといふ方がありませう。なるほど、事を後世に傳へようとするエジプト人の考は、遺蹟の何所にも窺はれますが、私にはそれだけでは淺薄な事にしか感じません。古代エジプト人の信仰を察する事が出来るといふ方がありませう。いかにも「ミイラ」について考へてみても、さういふ考が浮びます。しかし私は上野の博物館で、ミイラを見た時程、古代エジプト人を馬鹿々々しく思つたことはありません。精神が減びて形骸のみの存する見

苦しさを表はすものに、あの「ミイラ」以上のものがありませうか。私はエジプト古代の文化についても、思想についても、信仰についても全く無智です。無智なるが故に、私としての考はたしかなのです。私は高等小學讀本の編纂者に、この一課を何故に加へられたかをきいてみたいと思ひます。從來の讀本にあつたからなどと、お座なりをいはないで、こゝに加へて、高等科の兒童に是非讀ませなければならぬといふ理由がきゝたいと思ひます。

私は自分の身にかゝる事のやうに思はれてなりません。文化には時に人心をむしばむ程の毒素を有することを物語つてゐるものやうに思はれてなりません。五千年の昔に、ピラミットを作り、オベリスクを作り、スフィンクスを作り、ミイラを作つたエジプト人が、五千年の後に、何故世界の最強國民として現存しないでせうか。何故北方非文化的の民族に壓倒されて、その文化がかく地にまみれてしまつたのでせうか。私はピラミット・ス



フイックス・オベリスクを、たゞその物としてのみ見る事が出来ません。それ等が今に巍然として立つてゐるのは、これ等偉大なるものを作つた民族の末路を見よ」と呼びかけてゐるのではありますまいか。「汝等のあこがる文化には、汝等を絶滅せしむるに足るものがある」と警告してゐるのではありますまいか。私はかういふ意味に、エジプトの遺蹟を讀む時は、始めて我が國の教科書として、意義あるやうに感ずるのであります。私どもは、エジプト古代の文化、思想、信仰等を、よく知らなくても、事を缺くほどの不都合はありません。しかしエジプトの遺蹟からこの警告をきくことは、當今の我が國民には、わけても大切なことであります。そこに我が國の教材としては甚だ意義の深いものとなると思ひます。私はかうした事を「自己を讀む」といひたいのです。エジプトの遺蹟にそんな意義があるものかと詰問されても、私はさう讀んで、はじめて意義があるので、致し方がありません。

せん。

私は決して言を好むではありませんが、物質文化と精神文化は、どうも並行しにくいのではないかと思ひます。物質を追ふ者には、とかく精神が輕視され、精神を追ふ者には、とかく物質が輕視され易いやうです。精神文化が衰へたら、いかに物質文化が進んでゐても、國家の存立といふ點から見ても、ろいものではあるまいかと思ひます。エジプトの文化は物質にすぐれて、精神がこれに伴はなかつたのかと思ひます。この前車のくつがへつた跡を行く日本文化は、物質に飽くまで伸びると共に、精神にも飽くまで伸びて、主從輕重をあやまらないやうにしなければならぬと思ひます。

私はこの頃東海道を往來して、濱松以西大垣以東の鐵道沿線に、大工場の新築せられつゝあるのの餘りにも多いのに驚きました。蓋し海外貿易が好調なのでせう。私は常に生産費の安い日本商品は、何としても貿易上底



の知れない強みであると思ひます。生産費の易い一大原因は生活費が安いからでせう。簡易生活に安んじて、労働を樂しむ日本民族には、物心融合、或は物心未分といふべき世界に、まさに優勝者たり得る素質をそなへてゐるのです。それを育てることが、日本文化の精神であり、日本文化を永遠に伸展せしむる所以であります。ところが勞力を有するものは勞力に偏し、資本を有する者は、自然と資力に傾きます。物の世界に於てすら、その分配の如何によつて、争の種となつてゐるのであります。何で精神文化に想到する餘裕がありません。私どもはどうしても物心未分の世界、——假りに之をまことの世界と申しておきます。——即ち「まことの世界」に立ち、一切を考へ直して、そこに安んじなければなりません。エジプトの遺蹟は、國民の爲に、永遠に興隆すべき大法輪を轉じてゐてくれるのかと存じます。物質文化の勝利は、その事の裡に、既に滅亡の義を包有してをります。精神

文化の勝利は、人間性に充たされぬものがあつて、克己禁慾のために、人間自體が減びて行きます。私は物質と精神の融合未分の世界をみとめ、之に安んじて、我が日本精神を永遠に樹立し、之によつて全世界を指導しなければならぬと思ひます。それには日本國民が、一人残らず、末梢的生活から、まづ「まことの世界」にかへるべき心構を持つことが急務でございます。

以上船田定次郎氏公益神社・エジプトの遺蹟を書いて、國語教育易行道の緒言と致しました。何處かに、この書の説かんとすることを暗示してゐるやうにもあり、また全く纏りのないことのやうにも思ひます。書いてゐる自分さへさう思ふのですから、御覽下さる方々はどれほど物足らなく思召すかとお氣の毒に存じます。たゞこの書が皆さんを外の末梢へ誘ふことなく、皆さんの内に藏せらるゝ尊き「まことの世界」への旅の餞けともなりましたら、著者として満足するのでございます。



## 二 教壇行脚

教壇行脚

教壇行脚、今から思ふと、如何にもをかきな言葉のやうですが、當時はこの外に言現し方がなかつたのです。東京高師の國枝教授のお宅に上つた時、私の生活を話しましたら、教授は「英國には修身科でさうしたことを試みてゐる者がある」とかおつしやいました。今は早教壇行脚も殆ど十年になります。私はこの生活によつて、幾らか育つたやうな感じもしますし、又之によつて、我が生にはじめて意義を生じたやうにも思ひます。

私にもしこの教壇行脚といふ生活がなかつたと致しましたら、東京高師の十六年も、朝鮮總督府の三年も、南洋廳の一年も、極めて意義の乏しいものになつてしまつたかと思ひます。高師にゐた前の十年は、専ら教壇に親しみました。後の五年は、教壇は本體として、傍國語讀本の編纂のお手傳に、文

私の過去

部省の讀本編輯室に通ひました。朝鮮の三年は専ら普通學校の國語讀本編纂、南洋の一年は、公學校の國語讀本編纂に従事したのでした。私は時々私の過去をふりかへつて、私程仕合せなものも多くあるまいと思ひます。教育といふ程の教育をうけないものが、多年高師附屬小學校の教壇をふむことさへ望外であるのに、文部省、朝鮮總督府、南洋廳の讀本編纂事務にたづさはるなど、全く希有の事でございます。さうした公的生活を、五十三歳の春に終へて、餘生を教壇行脚に送り、かつて教壇に於て、編輯に於て、苦心經驗した所を親しく全國の兒童に試みて、人の知らない怡悅を味はつたといふことは何といふ幸福でせう。之を思ふにつけても、私は國語教育に終生をさへけて、盡さなければならぬと思ひます。

教壇行脚の十年は、匆忙の中に過ぎてしまひました。しかし大正十四年九月二十一日、濱松師範學校附屬小學校、尋四の教壇に立つて、「彼岸」を取扱つ

この十年の追憶

二 教壇行脚

二三



たことを想ひ起すと、極めて遠き昔のやうにも感じます。我が師垣内先生でさへ、この頃になつて「あの當時、果して教壇行脚といふことが成立つものかどうかを疑つた」と仰せられました。まして一通の知人は、齒牙にもかけず、たゞ物笑の種にしたばかりでした。親友の中にも、眞剣に私の身の上をきづかつて「老人の冷水だ、もはやお前が出る幕ではない。よしたまへ」といつてくれた者もありました。私とても十年後の今日を、その第一日にどうして豫測し得ませう。たゞ教壇が戀しきまゝに、もつと端的にいへば、私は教壇以外に行くべき世界がなかつたために、今一つはどうしても生きなければならぬ事情の身にまつはつてゐた爲に、私は私の唯一の世界をひた走りに走りぬけたといふまででした。

最初の三年

教壇行脚最初の三年は、涙のにぢむ日が少くありませんでした。私の腕はかうも弱いものだつたらうか。教材を見る目、兒童を見る目が、かうも鈍

次の三年

いものだつたらうかと、餘りのくやしさに涙するのです。その昔高師時代に、多少自惚も交つての自信が、全く粉碎されてしまひました。一體教育といふものは、日頃手がけてゐる子供にのみなし得るもので、一日或は數日の接觸には、意義をなさないものであらうかなど考へはじめました。私は内にかうした惱を持つと、これが何とかならなくては、氣が濟まないたちです。今こそ五千餘の同志があつて、養護して下さいけれども、私が教壇行脚を標榜して踏出した頃は、到る處悉く荆棘林中でした。中には教へて下さる厚意か、それとも中傷の惡意かは知らぬが、あらぬ批難、思はぬ侮蔑を浴びせて、一時の快をむさほる方もありました。私はこの三年間に、人間の種々相を深刻に見ました。今から思ふと、それが一つの幸福でもありません。その後の三年、即ち十年の中の三年には、たしかに一道の光明をみとめました。一日の教育には、一日の意義があることを悟りました。却つて數年



相接してゐても、教育の實のあがぬ事實をさへ見ました。なほ切込んでいへば、兒童を破壊してゐる事實をさへ見ました。私は窃かに思ひました。若し魂と魂とが相搏つて、そこに眼が開けるとしたら、たとひ一日の師でも、それは一生の師であることがあり、幾年師事しても、さらに心に響くところがなかつたとしたら、それは幾年か相接した他人にしか過ぎないのだと思ひました。言葉が甚だ奇矯のやうでございしますが、必ずしも例を松阪の一夜にかりる要もございせん。私にしても、また讀者の皆さんにしても、小學以來師と仰いだ方といつたら、箕ではかる程ございませう。それが多くは今から思ふと、他人でしかなかつたことがおわかりでございませう。一日の師でも、なほかつ幾年の師にまさる場合があります。教育は開眼の仕事であり、鍛錬の仕事であります。世には開眼の事がなくて、鍛錬の事が機械的に存する場合があります。それは多く罪惡で、被教育者の破壊に終

るのが常です。

こゝに氣がつかましてからは、私の教壇修行には可なり脂がのつて來ました。全く他人の問題ではなくなりました。自らすら安んじない事を以つて、何んで他人を安んぜしむることが出來ようかと考へて來ました。かう考へはじめると、小學兒童を指導するにも、一心不動の境地に立つといふことは、決して容易なことではありませんでした。必ず多少の雜念が往來して、如何にも困難なことだと思ひました。けれどもそれを目ざして進む日は實に楽しいものでありました。さて一心の動不動は、他の何人もはかり知る事の出來ない所です。自分のみがよく知つてゐるのです。故に他人が「結構でした」といつて下さつても、自分では穴にでもはいりたいやうな事がありました。批難百出、取るに足らずといひすゑられました時でも、微笑して感謝する日もありました。晴れた日もあり、曇つた日もあり、土砂降



りの日もあつて、三年は過ぎました。その中に極樂の道は一筋である。ただ弛む心をいまして進むことだと考へました。その頃から垣内先生に一度御指導が仰ぎたいと思ふやうになりました。

垣内先生  
の御指導  
を仰ぐ

今は早三年になります。昭和七年の二月二十九日と三月一日、今の東京市澁谷區千駄ヶ谷小學校で、垣内先生の御指導を仰ぐ機縁が熟しました。私は尋四の女兒に乃木大將の幼年時代を取扱ひました。先生は仔細に御覽下さつて、十分に御指導を給はりました。(その次第は、垣内先生の御指導を仰ぐ記)として同志同行社から發行してゐます)私としてはこの道以外に道はないと信じて、六年餘歩いては來ましたもの、高遠なる學理に照らしたら、さてどうあらうかとは、可なりの不安でございました。幸に先生の御承認を得ればよろしいが、若しその行き方が間違つてゐるといふことになつたらどうしようか。是を捨てては、私は他に行くべき道がないのだがと

考へては、何ともいへぬ寂しさをさへ感じました。私はかうした場合、退いて安きを求めるか、進んで碎けるかといふと、最善の用意をして、必ず碎ける覺悟で進みます。この時には、私としては十分の用意を致しました。壇上に於ても、わざとらしくならないやうにつとめました。全國から參加してくれた同志が、非常に氣遣つてくれたのも、全く無理ではなかつたと、今も感謝してゐます。

さて御指導を仰いでみて、私の歩みが甚だしく道をあやまつてゐなかつたことが明らかになりました。安んじてこの道を進めばよいとの自信もつきました。それよりも之が縁となつて、大旅行の後には、必ず先生の膝下に走つて、私の多少ともかはつたと思ふ教壇を御報告申し上げ、教壇所得の實際問題について、御指導を仰ぐやうになりました。これが私をどれだけ育てたかわかりません。私は先生の膝下に教を請ふやうになりましたか



「人は師がなくては育てるものではない」と、堅く信ずるやうになりました。師の御指導を仰いで以來のこの三年、人は幾歳になつても育つものだ」とたしかに信ずるやうになりました。

最近の三四年、まだ、物足らぬ所はありますが、それでも多少安んずる所を得て、教壇に立つことが出来るやうになりました。うまく行く日ばかりはありませんけれども、私の安心には些の亂れを感じない日が多くなりました。生き甲斐のあるといふのは、これかなと思ふ日さへ出来て來ました。有難いことでございます。

私はこの頃になつて、しみじみと思ひます。私が若しこの十年、この教壇行脚の旅に出ないで、釣にでもこるか、碁會所にでも通つて暮らしたとしたら、實にいひ甲斐なき一生でありましたと。誰も歩いた事のない道を歩いて、今なほ教壇にかく親しむことが出来るのは、人間最大の幸福かと思ひます。

私は起てなくなるまで教壇をふんで、多少でも斯道の研究者に研究の資料を残しておきたいと思ひます。當來の死はもはや十年とは待ちますまい。その押縮められた時間に於て、私は力の限り働いて所信を明らかにしなければならぬと思ひます。

私はこれから教壇行脚十年の所見について、書いてみようと思ひます。私は唯子供がすきで、之に接してゐると、世の事一切を忘れて嬉しくなるのです。さうしてそこに何等かの教育的意義を發見します。かうした私が十年教壇行脚の所見を書かうといふのです。もとより學的論據のある筈がございません。しかし十年のかさね寫眞で、その最も黒い部分であることだけは事實です。私が、何にも縛られない目で見たといふことも事實です。この愚に及ぶ人も少いかと思ひます。

オ月サマ

私の教壇行脚所見の御承認を得たために、小學國語讀本の卷二、オ月サ

教壇行脚  
十年の所見



マ]について、四國と東京と北海道の子供の心の動きが、符節を合するやうであつたといふ一挿話を試みます。四國の子供といふのは、川之江の古田擴君の長女明子さんです。私と古田君が二の巻「オ月サマ」の所を話しあつてゐる所へ、明子さんがちよこくとやつて來ました。勿論明子さんは、まだ卷二を知らないのです。古田君が緩讀一回「明子どこが好きか」といふと言下に「ニハ ノ ススキ ガ オイデオイデ ヲ シテ キマス。」といふ所だといひました。その次はといふと「クサ ノ 中 デハ コホロギ ガ ナイテ キマス。」といふ所だといひました。今も今とて、六十一の老翁と三十八の學者が「いかにもうまいね」と歎稱した所でした。これでは少面目次第もないやうな氣も致しますが、こゝが私には嬉しくてたまらない所なのです。こゝで味を占めた私は、東京に歸つて、尋二の孫——名は同じ明子ですが、年は一つ上です——に、古田君同様、緩讀一回して「好きな所は」

ときいてみました。すると「ニハ ノ ススキ ガ オイデオイデ ヲ シテ キマス。」といふ所だと申しました。嬉しくなつて「その次は」ときくと「クサ ノ 中 デハ コホロギ ガ ナイテ キマス。」といふ所だと、あつさりやつてのけました。之が狂つては、少々こちらのあてが外れるのですが、餘りにもびつたり行つたので、勢「なぜね」と問返さずにはゐられませんでした。すると「静かだわね」と、ねに力を入れて申しました。老翁悉く恐悦至極といつた體でございました。それから北海道に行くことになつてゐましたから、沖垣君の長男尋二の齋坊に、之を試みようと思へました。小樽について、ある日の晝食後、私と唯二人の時例によつて私が緩讀一回「好きな所は」ときゝますと、やはり「ニハ ノ ススキ ガ オイデオイデ ヲ シテ キマス。」と「クサ ノ 中 デハ コホロギ ガ ナイテ キマス。」といふ所だと申しました。私はいよゝ嬉しくてたまりません。「その次」



は試みにきいてみましたら「ソラ デハ、オホシサマ ガ 光リハジメ  
マシタ。」だと答へました。違つては話の種にもなりません。が、あまりに符  
合したので底氣味がわるいやうに思ひました。

さてこの三事實をどう見るかといふが問題です。三兒はほゞ似たやう  
な育ち方をしてゐます。餘りにほめてもなく、叱つてもありません。學習  
も學校にまかせて、家庭でいやな手が入れてありません。成績もまづ似た  
ものでせう。試験者は、古田君私でかほりましたが、方法は古田君のしたま  
まをうけついたのでです。材料は卷二の「オ月サマ」です。それに對する所要  
の答が同一であつたといふことは、子供の心に響くところは、略似たものだ  
といふ立言の資料としては、可なり有力なものだらうと思ひます。かの一  
時流行した實驗心理の研究として、數學級の兒童を講堂に集め、それにある  
種の問題を與へて筆答せしめ、その答案を分類統計して、いかにも一大眞理

を發見し得たやうに喜んだのに較べると、私の研究人員は百が一にも足り  
ませんけれども、確實さに於ては、十百倍の數を以てした實驗よりも、まさる  
とも劣ることはないと思ひます。

小學教師の實驗といふものはかうしたものだらうと思ひます。生きた  
目で見たかさね寫眞が、一番活用の利くものでございませう。測定表によ  
らなければ、兒童の性能がわからないなどといふ事は、間にも拍子にもあつ  
たものではありません。私は小學教師の兒童觀察は、分析的によるよりも  
刀劍の目利、書畫鑑定のような修養法によつて、目を修練するがよいと思ひ  
ます。

以上申し述べました所が、もし承認されると致しましたら、芦田といふ同  
一人——日々多少とも發達する者としたら、同一人の存在は認められませ  
んけれども——が尋常小學國語讀本、又は小學國語讀本といふ同一教材を、



全国の兒童に取扱つてみての所産は、よし學的論據はなくても、相當價值を認めてもよいかと存じます。たゞ私の眞心が私心のために暗くなつた場合、私の立言は全く無價値のものとなつてしまふのです。しかしそれは他人の容喙することの出来ない場合でありまして、そこに教壇良心、即ち人間の根本問題が横はつてゐるのかと存じます。私はさうしたことを心の底に思つて、これから教壇行脚の所見を説いてみようと思ひます。

教室内の兒童の姿勢には、その時間の教育生活——教授——と切離すことの出来ないものがあります。教室内の姿勢といへば、あの壁にかゝけてある姿勢圖が模範でせう。時には姿勢訓練といふので、手は、足は、目は、頭は、腰はと、人形をいぢるやうに、機械的に動かして、さうして後の御託宣にいはく、「その姿勢で五分間ゐられるものはえらい。一時間ゐれば甲上だね」とかうやられてはたまりません。試みに先生がその姿勢で、ものの十分もゐ

## 姿勢

て御覽なさい。氣が遠くなつてしまひます。いくら「鐵は熱いうちに来たへなければならぬ」といつても、鐵と同様に心得て取扱はれては、きたへられる當體がまるつてしまひます。之を外からする教育といつて、稀に必要なことはありまして、それは内からする教育の足らざるを補ふ程度のもんです。この姿勢訓練で一つ躓くと「先生は出来ないことをいふ方だ」と、稚い者の頭にも暗い影をなけます。これが難行道の第一歩、去勢最初の技で、上根の者を除いては、切抜けることの出来ない柵でございます。こんな難所が、先生の軽々と仰せられる姿勢訓練、入學幾日目かの所に存するのですから、警戒を要する事だと思ひます。

兒童の全注意を傾倒して聽入る教授でありましたら、下學年より上學年まで、腰がすつくと立つて、少し前に寄掛る姿勢をしてゐます。半聽入る教授の時は、腰は立つても寄掛るまでには至らず、お義理に聽いてゐる姿勢と



なると、腰はどつかりと落ちて、背は弓なりになつてゐます。かうした觀點よりするを内よりする教育といひますが、之を實現しようといふには垣内先生の「おつしやる」教育者堪能を要する事かと思ひます。

私は下學年から上學年まで、姿勢を正すには「腰を立てて」の一命令で貫きました。試みに腰を立ててごらん下さい。足も、手も、頭も、自然の位置をとらなければ、腰一つがきまるものではありません。用のない時は、手を丹田に組ませて御覽下さい。一心不動の自覺が自ら湧いて來ます。誰の定めた事か、手を後にまはして、腰掛の横木を掴ませることは。又誰のいひ出した事か、手を握つて机の上におかせる事は。何事も大和民族のとつて來た行住座臥の作法に叶ふやうにありたいと存じます。若しそれ子供の手は、いたづらをするに敏捷だからといふやうな考が加はつての握拳や、腰掛の横木であつたら、その人の心の根本に、兒童の姿勢を議する資格を缺いてゐ

て腰を立て

ます。餘談ながら、腰を立てて、心ひろく體のたかな感、堂々たる感、悠揚せまらざる感などを内省して、自分の姿勢を自分でうちたてるやうにさせたいと思ひます。學校といふ教育所に、師弟といふ教育の當體の相接する所に、一つの姿勢、一つの應答にでも、全教育の精神のあふれてゐるやうになりましたら、人のためにも國の爲にも私は嬉しくてたまらない事だらうと思ひます。

教室内の空氣も面白い問題です。私は田舎に育つたせるか、苗代田を見ることが好きです。苗代田のどの苗一本を見ても、伸びようとしてゐないものはありません。都會の子供は、稗蒔を特に好むやうです。自分に共鳴するところが多いからでせう。私は苗代田や稗蒔のやうな生々した氣分の教室が何處にもほしいと思ひます。教室が何のために存するかを、師弟共によく考へなければなりません。兒童からいへば、自分等が共に伸び行

教室内の  
空氣



く苗代田です。その點からいへば、先生は兒童の伸び行く事情をよくして下さる管理者です。しかし管理者の仕向け方一つで、苗の生長に大なる影響があります。その點からいへば、先生は神様のお仕事をなさる方です。とにかく兒童一人を一本の苗と見て、學級全員五六十人の教室を、五六十本の苗が植ゑてある苗床と見たら、その教室になくはならないものは、一見生々の氣を感じる、生々そのものではありますまいか。苗代田におそるゝ事は、苗の勢がわるいことです。教室に忌むことは、兒童の萎れてゐることです。苗に勢がなく、兒童に元氣が缺けてゐましたら、それは苗代田といふにも、教室といふにも如何はしいものであります。さらに秋のみのりを思ひ、十數年後の國家を思ふ時、實に寒心に堪へないものだと思ひます。

墓場のやうな教室

私は墓場のやうな教室を見たことがあります。極めて靜かではあります。すが、生氣がありません。冷たくてうるほひがありません。それでゐる訓

練がよいといひ、整つた教室だといふのですから、私は泣きたくなります。兒童の生氣を奪つて、それでうまく躰け得たなどは、あまりにも蟲のいゝ話だと思ひます。教育の冒瀆だと悲しみます。生氣はあふれてゐるが、安んずる所に立つて靜寂なのが教育の眞の姿でせう。

兒童の眞相

中等學校には、生徒に白い齒を見せるなといふ教師訓があります。「笑ふな」といふことです。人間からこの尊い笑を除いたら、どんなに冷たい淋しいものでせう。笑があればこそ、共に道を進む樂しさが語らはれるのです。そこで育つて來た先生は、多くは笑を忘れてゐます。忘れたのではないほんたうには笑へない人です。その笑へない心に被教育者は手にはあはないものと考へてゐるのだから、たまりません。ところが兒童は決して手にはあはないものではありません。如何なる場合にでも、教師が兒童を押へようとか、うまく率ゐようとかいふ考を捨てて、教師自ら落着いてごらんさい。



兒童はひとりでに落着くものです。他人を管理する秘訣は、自分を管理することです。子供が騒ぐ以前に、自分がまづ騒いでゐるのです。よし何かの變調で、兒童が一時間さわぐやうなことがあつたら、かうした中では、誰でも仕事は出来ずまいと澄ましてをれば、兒童はおのづとその非をさとするものです。五、六月の交地方を旅行すると、新しく女師を卒業した方などが、尋一尋二にあふられて、泣かんばかりに持餘してゐる方があります。むづかしい教育學の知識よりも、かうした場合に、共に道に立つ心構を教へておかないといふことはありません。師範の教育も多少不親切だと思ふことがあります。

私の子供といふものは、既に育つてしまひました。今學齡にあるのは三人の孫でございます。私はその孫等のために、よい空氣の教室にはいりますようと、新學期の來るたびに、祈らないことはありません。空氣のよい

## 生氣

所にゐれば、素直に育ちます。空氣がわるいと、とかく性格がこぢれて來ます。私は生氣に充ちた教室がほしいと思ひます。生氣といへば、あの運動場を何と御覽になりますか。始業前、休憩時間、おひるの休、放課後、いつとても、嬉々として生氣の溢れてゐない時はありません。あれが兒童の持前で、す。おのづからなる姿です。いかなれば教室の姿と、これほどまでにひどく違ふのでせう。勿論仕事は違ひます。自由さも違ひます。けれども兒童は同じ兒童です。私は何とかして、あの運動場の氣分、生氣にみち／＼た氣分を、教室に移したいと思ひます。

生きた兒童の姿は、教壇行脚者に最もよくわかります。兒童は新しいことを好むものです。私のやうなものでも、初めての教壇に立つと、相當好奇心をそゝるものと見えて、兒童の目は輝いて來ます。しかしその輝きは、私は何者であるかを理解せんとするもので、探偵の目の輝きに通ふ者があり



ます。數分か十數分讀んだり話しあつたりしてゐるうちに、心に一二共鳴する所があつて不安が拭ひ去られると、目の輝きは眞摯の色にかはります。かうなつたらもはや我が物です。その求むる心に乗つて行けば、他にそれるものは一人もありません。優といひ、中といひ、劣といひますが、その求めてゐることは、優は優に、中は中に、劣は劣にと、少しもかはりがありません。そこに運動場と同じ、生々の氣に充ちた空氣がたゞよつて來ます。餘談ですが、私が教壇に立つと、何處でも劣等兒がよく動くといつて下さいます。それは私が幼時劣等生であつたがために、劣等兒の直覺に、快感を覺えて「我が友來れり、意を強うするに足る」と歓迎するのも知れません。しかし天賦は劣等兒ならざるもの、それが教室の學習に於てのみ、常に出來ないといはれて、すつかり氣を腐らせてゐる者があります。それが私によつて平等に見られるのです。そこに嬉しさを感じるのではないかと思ひます。

今日こそ殊勳をたててといふ子供らしい名譽心なども加はつて、活動するのではないかと思ひます。生きてゐる兒童は求める心が強く、それがいかなる事にも完全を目ざしてゐるのが面白いと思ひます。兒童が身心ともにすく／＼と伸びるのは、これが爲だらうと思ひます。兒童は心に觸れる所、響く所があれば、最善の力を盡すものですが、觸れないこと、響かないことを強ひられると、半醒半睡のやうな目をして、ひたすら終の鈴の救をまつやうなあきらめをさへ示します。私が教壇行脚十年によつて、多少發達したかと思ふのは、かうした兒童の動きが可なりに見えだしたことです。

兒童は相似たものであると思ひます。南臺灣から北北海道にかけて、實際に兒童を取扱つてみると、極めて相似たものであると思ひます。但し讀本を讀みかつ書く程度に於て、今の小學先生方に考へられてゐる程の差は、決してあるものではありません。讀本は決して高い程度のもではありません。

最低の成績



ません。中位のものでありません。國家が國民全般に讀みかつ書かせたいといふ最低限度の要求です。私はあの讀本を小學兒童が全部讀み、全部書く位のことは、最低の成績として、六年間にしなければならぬことだと思ひます。それが小學教育の力といふもので、そこに目標をおいて努力する事が、興隆的の國民を育てる事だと思ひます。私の教壇行脚の所見では、それは少しもむづかしいことでは無いと思ひます。小學國語讀本をその程度の學年に配し、彼等の求むる心に讀まんとする一念をさへ喚びさせば、少しもむづかしい事はありません。ひるがへつて今の讀方教授を見ると大半は無用甚だしきは却つて讀まんとする心を銷磨することになりはすまいかと思はれることがあります。さて私のかうした所見が、若し今を去る十四五年前、東京高師附屬小學校在職時代に發表したのだつたら、全國の小學先生は必ず「選抜した中流以上の家庭の兒童を集めて、而も家庭教

師つきで教へてゐるのではないか。さうした事情のもとにはさうした事もいへよう」と一笑に葬り去られたかと思ひます。ところが今度の立言の材料は、全部お手許から頂戴してありまして、それが殆ど全國にわたつてゐますから、冷笑も以前のやうには私には利きません。却つてさうした所に安心の天地を求めてゐるなざるのを私は冷笑したい程です。

私は今の小學生を、しみじみ氣の毒に思ひます。常に差別の眼でばかり見られて、平等の目では殆ど見られたことがないやうです。差別の眼で見ると、優中劣が生じ、劣の中に、中を優にと、難行道も生じるのです。勿論平等の目で御覽になつても、優中劣はあります。けれども優中劣がその天賦の差別をかへりみないで、たゞ一途に育たうと努力するところを尊いものと見るのです。そこを見る時、如何なるものに對しても心の底から愛する心も沸き、敬する心も生ずるのです。それが人を育てる道です。そこに導

人を育てる道



く時いかなる者も努めて倦まず、學んで飽きざる法悦の大道に到達するのです。坦々たる易行の一道がある譯です。

甚だ失禮なことを申すやうですが、今の小學先生は、どなたでも差別の眼で見られて、優秀といはれた方でせう。幾多の選抜試験の勝利者で、今日の榮職を勝ち得られた方ばかりでせう。皆さんのお心を常に支配したものは、優勝者たる競争ではなかつたですか。その所願が成就して、今日の地位でせう。まことに目出たいことではありますが、皆さんが見られなすつたやうに、兒童を御覽になると、兒童がまた皆さんと同じ苦しみをなめることになります。この差別觀、相對觀の世界に惱む人生の最大苦は、テニスやバイオリン位では拭はれません。もつと深い根柢に於て、考へ直さなければなりません。諸先生が現在の御生活を法悦そのものであるとおつしやるならば、私は一言も申すことはありません。けれども若し不安だとか煩

優等兒と  
劣等兒

悶があるとか仰せられるならば、兒童をして其所に到らしめないやうに救うていたゞきたいと申します。私が易行道を説く意もそこにあり、教育の王道も亦そこにあると思ひます。我が國の小學諸先生、おのれを救ひ、同時に他を救ふこの一道を十分に御研究下さいませ。

優等兒と劣等兒 教壇行脚者が知るのは、席圖につけてある印による場合が多いのです。優等兒には二重まる、劣等兒には三角がつけてあります。三角は教室の前方、教師にちかい所に、二重丸はその反對の後方に位置してゐます。私はこの印のつけてある席圖を見ることが極めてきらひです。私はそれを見る毎に、人にして眞に人を評價し得るものか否かといふやうな反抗の念が浮びます。今日の私には、席圖がなくても、最初に讀めない子供に讀ませて、その躓きから生ずる、沈んだ空気を教室に作るやうな事は決して致しません。故に席圖の要がありません。印の付してある席圖を信



じて兒童に仕事を命ずるのは、他人の目を借りて、自らの仕事をして行くといふことですから、うまく行かう道理もなく、面白くないことに思つてゐます。

劣等兒と  
なるまで

私は兒童がいかにして劣等兒と呼ばれるに至つたかを思ふ時、まことに氣の毒な感じが致します。新しいかばんをかけて、新しい草履袋を下けて、父か母かに附添はれて、初めて學校に來ました時、何で劣等兒といふ者がありませう。もしありとしたら、それは親が前もつて先生にことわる特殊な兒童であります。さうした子供は、社會では既に鑑別濟で、天保錢だとか、七分だとか、九分だとか、少々足りないとか、馬鹿だとか、薄のろだとか、中々に精密なことばで呼んでゐます。これは實生活の上から評價したものですから、誤認は決してありません。さうした評語を、社會から公正にいたゞいてゐる子だつたら、親として、だまつて先生に手渡しする譯はありません。「お

邪魔になりません程度で、片隅にでもおいてやつていたゞけば結構です」などいひます。全く身を切る思です。その裏面には何の因果でといふやうな悲しみもこもつてゐるのです。若し親が何の文句も、何の條件もつけないうで、先生に手渡したとしたら、それは少くとも、親の目にだけは、十人並に見えてゐる子です。普通兒と見て差支のない子です。それが一學期の通知表をいたゞく時になると、多少の等差がついて來ます。二學期にはその差が更に著しくなり、三學期には仲間でも明かに劣等兒として認め、自分でも漸く之を信するやうになります。さうして學校中でも、誰知らぬものないう劣等兒となつてしまふのです。不思議なことには、現級に留めおく數の多い擔任は、標準の高い名訓導として、校長に認められる場合があり、全員進級さす擔任は、父兄にこびる者として、校長のおほえも自然芳ばしくないと、いふやうな場合もあります。私はかうした事實を傍觀して常に思ふのは



先生のなさる事は總べて完全無缺として、他を評價なさるのだから、それも濟むやうなもの、嚴密に詮議して來たら、多くの劣等兒を生じた原因が那邊に存するものか、頗る疑はしいものであります。

劣等宣言の原據となる學期々々の試験とても、よく考へるといかにしるべきものです。問題は採點の便宜から、多くは文字の書取、教へた文章を讀ましてみれば位のことです。全く記憶過重の試験で、理會などの問題には、あまり觸れないのが普通のやうです。かうした造作ない試験ですが、その結果は兒童在學中の浮沈に係はる程の問題を生むのです。兒童の父母もその眞相を知らず、社會もかうした事には無關心ですから、かゝる教育的横暴が事なく濟んでゐますが、いつまでもこんな状態をだまつて見てゐるものはありません。劣等兒にも父がおります。母がおります。我が子の事として、人に語るも面はゆく、人知れぬ寢物語に、涙する夜が幾夜あるか知れま

劣等兒は  
多くはな  
い

せん。生先永き稚き者の爲に、よくよく考へてやつていたゞきたいと思ひます。

私は無暗に先生の方に矢先を向けるやうで、申譯がありませんが、私は實際世に劣等兒といふものは多くはないと信じてゐます。それには入學當初の兒童の語る言葉を注意してお聴きなさい。滿六歳といへば、生れて足かけ七年か八年、はじめの二三年は空々寂々、飲んで寝る肉塊のやうなものです。それが四五年の發育によつて、ともかくも人の言を解し、思ふことを語るまでになつて入學するのです。それが劣等といはれませうか。私は口語によつて人並の應對の出来る兒童の劣等兒となつた場合、教師は自分の爲したる一切の事について、深く反省してみなければならぬと思ひます。育つべく仕向けた事が、反對の結果を呈したといふには、猛省してみなければならぬことがあります。



驚くべき  
事實

若し讀本の讀めない者、書けない者といふ事を標準として、劣等兒を數へてみたら、恐らく上は文部大臣から、下は兒童を學校に送つてをる親迄、あつといつて魂消る程の數に上るでせう。實に讀めない子供書けない子供は、全國に夥しい事です。大都市の中でも驚く程あります。都市の子供は小利口で、六七分の讀み、六七分書けるのをもつて、これでよいもの、どうにか暮れて行くものとしてゐる風があります。手の抜けるだけ手を抜いて、いつた讀みや書寫が多くて、底力のある讀みや書寫は、實に寥々たるものです。こゝに文化病の微菌が潜むかと、私は氣味わるく思ふ程です。

山村農村・漁村・都市・都邑・何處に行つても、讀本の書けない子、讀めない子が澤山あります。その理由としての説明を一つの耳で聽くと、私以外の人をして聽かせてはならないと、しみじみ思ひます。山村の先生はいはく、「山村にして交通不便、何事も意にまかせず」と。農村の先生はいはく、「農事多忙、復

その説明  
にいはいはく

習豫習の寸暇を有せず、かつ家に文字ある者乏しく、教育の事に深き關心を有する者なし」と。漁村の先生はいはく、「その日かせぎの利那主義、教育のことなどてんで相手にしない」と。都邑の先生はいはく、「都會の文化が流れ込んで、この町にもカッフェーが十二月、玉屋が三軒出來た。ラヂオ、蓄音機、朝からやかましい事だ。人は落着を失つて、教育は非常な影響を蒙むやうになつた」と。いづれも讀めない、書けないといふ理由です。私はこれに答へて、「一つの耳で聽きますと、日本には讀める所、書ける所が何處にもないといふのが、當然であるやうに感じられて來ます」といつて、都市・山村・農村・漁村・都市・都邑のそれ々の理由を、一々紹介して、「私がうかゞふ分にはよろしいが、他の社會人にはゆめにも知らせてはならないことです」と、戒めもしたり、笑ひもしたりして來るのが常です。教育者の一面觀が、どれほど教育者の地位を輕めてゐるか知れませんが、中には、小學校の先生は、自分がわる



いといふことを、更にいはないものですね。目のつけ所が頗るわるい。それが識見の進まない譯です。あなたも小學校の先生だつたさうですと、露骨に一本とる方があります。

私はある處で、私の人相的見解からは、この筋の八人だつたら、讀めないものはまづ一人もあるまいと見て、後から順繰りに前へ讀ませて來ると、驚くなかれ讀めたものが五人、私が手傳つてやうく讀めたものが三人。その讀めたといふ者も、八分や九分で、自信ある底力を感じる讀みは一人もありませんでした。それで、議論をしたり、發表をしたりしてばかりゐるのだから、たまりません。私はこの時ほど、この子等がかうして育つたことに、氣の毒な感を持つたことはありません。かうした生活を六年間繼續讀めもしない本を諦視し、——讀めないから讀ませられる心配はないとしても——人の讀むのを聞いたふりに、本を持つたり置いたりして面白くもない月

ある教室

日を送つて來た事を思ふと、まるで讎詰のやうな生活です。氣の毒でたまりません。これで思想が悪化しなかつたら、それは奇蹟です。思想悪化の可なり太い根が、こんな所にあらうとは、誰も氣付かない所でせう。國の將來を思ふ者は、深く／＼考へなければならぬ事です。

劣等兒の出來てゐる教室は實に空氣がよくありません。よくないから、劣等兒が出來たともいはれませう。師弟全部が、共に育つのを楽しむといふやうな和やかさは、更に感じられません。一から十まで、兒童の名譽心競争心に鞭うつて、勝つたとか、敗れたとか、當つたとか、外れたとか、成功したとか、失敗したとか、まるで一六勝負の様な生活です。かうした處に生ひつた劣等兒は、相對觀のつよい者で、小するい者か、利口な意氣地なしかで、好ましくない者が多いのです。教室内の空氣が裂けてゐるか、雷同してゐるか、私にはすぐそれが感じられますが、とにかくいやなものです。劣等兒は大

劣等兒の  
出來る教  
室の空氣



抵自楽心の持主です。これあるがために、劣等児は浮び上ることが出来ないので。優等児は多く自負心の持主です。これあるがために、優等児は他と一つになりにくいのです。劣等児の發生する教室の優等児は、今日の中等學校の入學受験位には間にはあつても、人としての尊さから見ても、どうあらうか。師弟一如、優中劣各その處に安んじて、共に育つを楽しむといふ境地には、甚だ縁遠きもののやうに思はれます。

小學校の優等児、必ず社會に於ける優等児ではありません。小學校の劣等児、必ずしも社會に於ける劣等児ではありません。却つて育つた後には、優等児が輕薄子の色を示し、劣等児が質實の傾を示してをる者もあります。そこが教育上の重要問題で、自然の教育の恩澤とでも申しませう。優等児にも春が來るやうに、劣等児にも春が來ます。人の情を知る時が來ます。小學校では劣等児は沙漠といふよりも、むしろ茨の枯野を旅行する者であ

社會に出  
劣後の優

りました。たゞ寂しいばかりでなく、事毎に刺を感じて來たのでした。面白くもない世の中でした。一度も得意の味を知らないで來たのでした。それが自然の力に恵まれて、舞踊の興味を感じ、朗吟の趣味をさとり、スターの寫眞を集めて、戀愛を解するやうになると、茨の枯野が急に春の野にかはります。この時劣等児が、はじめて生き甲斐のある生活を覺つて、動きはじめます。その勢は實に猛然たるものです。全く盲目的です。何物もよく之を阻止するものはありません。この時あまりに之を拘束すると、それは三原山最期の旅を促進するに止まる場合があります。又それをなすがままの放漫にまかせても、人としてつひに世に立てなくなつてしまふことがあります。この場合には、十分に勞苦の味を知つて、世の一切を承認するやうな師が之を抱擁しましたら、劣等児といへども、必ずしも人にならないとは限りません。けれどもそれは頗る幸運な劣等児の幾人かで、全部が救は



れるといふ譯にはまゐりません。劣等兒は自棄心の持主だけに世に對して反感を持つてゐます。故にその土に平凡に終る者は、むしろ幸福なる劣等兒で、時にはおのが反感の犠牲になつて、大罪を犯すものさへあります。

劣等兒の  
苦勞

劣等兒が正しき生活をしようといふには、人一倍の苦勞があります。小學に於いて人に後れただけでも、取返さなければなりません。まして年頃になつて、正則に進んで來た人に伍して、人並に歩かうといふには、稚なかりし日の身の不幸を、しみじみかこつ日があります。

私は小學校に於ける優秀なる劣等兒で、青年期壯年期は、本能の衝動になやみ、經濟的の災厄になやみ、なやみくゞて、今六十三の老年期に達したので、ふりかへつてみると、私の過去一切を承認したいやうな氣がします。なやみの到來する毎に、私は育てられて來たと思ひます。私の歩いた道は、馬の脊越か、二河白道のやうな所でした。善いことばかりもしなかつたの

ですが、こゝまで來て、劣等兒のなやみの例に、おのれをかうして書くだけでも、まづ幸福の部かと思ひます。私のうけた教育は、難行道中の難行道であつたかと思ひます。自分が下根である爲に、さう思つたのかも知れませんが、しかし私の今考へてゐる易行道のやうな所を歩ませてくれたら、私のやうに苦勞をしないで、早く明朗な天地に出られたのではなからうかと思ひます。かうしたことも、私が易行道を求める遠因になつたのだらうと思ひます。



### 三 國語教育易行道

危機

國語教育が眞の道を行かなければ國心は裂けてしまひませう。もしその際に、私心の跳梁を來したら、「上下こもく、利をとりて國危し」といふ、孟子の慨歎せられた事情を生じて、取返しつかないことになりませう。

易行道といへば、親鸞上人を聯想なさるでせう。上人の易行道を唱へられた御心は、彌陀信仰の一念を、人々の心にうち立てようと思召したのでせう。その安心が佛の道であり、人の道であるとおさとし下されたのでせう。易行道といへば、對立的に難行道を想起するでせう。もし眞宗を易行道といふならば、禪宗などは難行道といはねばなりません。しかし道を求むる者に難易はないと思ひます。陶工柿右衛門のところに、

「喜三右衛門は其の日から赤色の焼付に熱申した。しかしいくら工夫をこらしても目ざす、柿の

易行道と  
難行道

色の美しさは出て來ない。毎日焼いてはくだけ、焼いてはくだけして、歎息する彼の様子は實に見る目もいたましい程であつた」

とある喜三右衛門の心境を、難とか易とか考へてはならないと思ひます。たゞ求むる柿の色の美しさがあるばかりです。見る目にはいたましい程に見えても、喜三右衛門には左程でもなかつたのでせう。その苦中の樂といふものは、同じ道を求めた者の間でなければ、理解されないことです。しかし人には上根と下根があります。喜三右衛門の艱難は、誰にでも之を望むといふ譯にはいきません。下根の者は道に到達しない前に、落伍してしまひます。上根の者も下根の者も、共に率ゐて行かねばならぬ國語教育では、努めて易行道を擇ばなければなりません。こゝに一言ことわつて置きますのは、今日の小學校に於ける國語教育は、たしかに難行であります。これに随つて行けば、道に行きつけるかといふと、それは甚だむづかしからう



と思ひます。恰も釋迦が六年間、五人の友と修行をせられました苦行のやうに、その行く方には道は存在しないのでせう。

私がことさらに國語教育の易行を説くのは、我が小學生をして國語教育によつて、各自の具有する眞心を拂拭し、まことの世界に安住せしめたいからです。而して日々の生活を樂しみ、國家の隆昌をいのり、世界の安寧に貢獻せしめたいからです。この事は、小學諸教科のどの科でも、なさねばならぬことです。が、生れたその日から死ぬるその時まで、常に我が魂を支持してゐる國語、それを教材とする國語科では、特に力を致さねばならないと思ひます。私が小學國語讀本を國民の經典だといふ意味は、こゝにあるのです。釋尊は私には易行道の行者だと思はれます。私はしばらくその御修行のあとを讀本の文について見て行かうと思ひます。

私の眞意

釋迦

釋 迦

釋迦は今から凡そ二千五百年前、北インドのヒマラヤ山のふもとカピラバスト王國の太子として生れた。

釋迦は生れつき同情の念に厚く、何事も深く考へ込むたちであつた。或時、父王と共に城外に出て、農夫の働く様を見廻つたことがある。ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて田をすき起し、牛はつかれ果ててあえぎ／＼働いてゐる。折から飛下りて來た鳥が、鋭に傷つけられた蟲をいばんだ。木蔭からじつと見てゐた彼は、しみ／＼と自分の身の上に思ひ比べて農夫や牛の勞苦を思ひやると共に、蟲の運命をあはれんだ。彼はだん／＼物思に沈むやうになつた。それを見てひどく氣をもんだ父王は、彼に妃を迎へ、目もまばゆい宮殿に住まはせて、國政にも與らせようとした。しかし彼は城外に出る毎に、杖にすがらあはれな老人や、息もたえ／＼の病人、さては野邊に送られる死者をまのあたり見て、益々世のはかなさを感じた。

「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。我々の行末はどうなるだらうか。」  
 こんな事を次から次へと考へては、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、

「此の上は聖賢を訪うて教を受ける外はない。」  
 と思ひたつに至つた。

父のいさめも妻のなげきも、此の決心をひるがへすことは出来なかつた。かくて彼は二十九歳



の或夜、人知れず宮殿を出て修行の途に上つた。

師を求めてあちらこちらさまよつてゐるうちに、マガタ國の首府王舎城の附近に來た。かねて釋迦の徳をしたつてゐたマガタ國王は、修行を思ひ止らせようとして、自分の國をゆづらうとまで申し出たが、彼の決心はどうしても動かなかつた。彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて説を聴いたが、どれにも満足することは出來ない。彼は遂に

「もう人にはたよるまい。自分一人で修行をしよう。」

と決心して、或靜かな森へ行つた。さうして此處で父王の心盡くしから送られた五人の友と、六年の間種々の苦行を試みた。

次第にやせ衰へて、物にすがらなければ立てない程になつた時、彼はいくら苦行をしても更に效のないことを知つた。そこで彼は先づ近所の河に浴し、たま／＼其處にゐた少女のさ／＼げた牛乳を飲んで元氣を回復した。ところが此の新たな態度に驚いた五人の友は、釋迦が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、彼を捨て、立去つた。

それから釋迦はブツダガヤの綠色濃き木蔭に靜坐しておもむろに思をこらした。今度は程よく食物も取り、休息もした。さうして日夜次々に起つて來る心の迷をしりぞけて唯一筋に悟の道を求めた。

或時のことである。彼は夜もすがら靜坐してひたすら思をこらしてゐると、やがて一點の明星がきらめいて、夜はほの／＼と明けそめた。其の刹那、彼は迷の雲がかりりと暗れて、はつきりとまことの道を悟り得た。彼は此の心境の尊さに數日の間唯うつとりとしてゐたが、やがて此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

釋迦は世を救ふ手始として先づかの五人の友をたづねた。かつて釋迦を見捨てた彼等も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。彼等は釋迦の教を聴いて即座に弟子となつた。

續いて釋迦はマガダ國王をたづねてねんごろに道を説聞かせ、更にカピラバストに歸つて、父王・妻子を始め國民を教化して故郷の恩に報いた。

今や釋迦は衆星の中の満月の如く國中から仰がれる身となつたが、中には彼をそねむあまり、反抗するばかりでなく、迫害を加へようとするものさへも出て來た。殊にデーバダツタは、いとこの身でありながら、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。或時の如きは、釋迦が山の下にゐるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、石は釋迦の足を傷つけただけで、目的を果すことは出來なかつた。

釋迦は八十歳の高年に及んでも、なほつゞれをまとひ飢と戦ひつゞ、各地を巡つて道を傳へて



ゐたが、遂に病を得てクシナガラ附近の林中に留つた。危篤の報が傳はると、これまで教を受けた人々が四方から集つて別れを惜しんだ。いよく臨終が近づいた時、釋迦は泣きながら人たちに

「私は行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたことを語り盡くした。これまで説いた教そのものが私の命である。私のなくなつた後も、めい／＼が其の教をまじめに行ふ所に私は永遠に生きてをる」と諭して靜かに眼を閉ぢた。

自ら欺くもの

私は釋迦については、この文章以外に多くを知りません。しかしこの文章を繰返し讀んだ事では、私は人後に落ちないつもりです。最初のうちは釋迦の傳記とのみ見えてゐましたが、その中に傳記の中でも、修行のあとを主として書いたものだといふ事が明らかになりました。さて修行のあとを書いたものだと見て來ると、私の修行といふもをこがましい程ながら、自分の履んで來た跡を思ひ合はせて、面白くてたまらない所が見えて來まし

た。それは苦行の效なきを悟つて、靜坐の易行についた所です。普通のものは、效なきを知つても、中々その修行を棄て得ないものです。父王の心盡くしから送られた五人の友がそれです。釋迦が少女の手から牛乳をもらつて飲んだといふので、修行をすてたものとして、釋迦を見捨てて立去つたのです。これを我が國の國語教育に比較すると、六十年來、一度も學級全體、學校全體に讀本の讀めたことも、書けたこともない教法を踏襲して、研究したとは唯名のみ、一度も實蹟にあらはれないことに安んじて、己を欺き、兒童をも欺いてゐる事實に酷似してゐませう。行きつけない道に導いて、行きつけるものの如く装つてゐるのは、欺くものではありませんまいか。

苦行が效のないことは、心身二元に墮してゐるからでせう。心の清淨を得んがために、肉體を苦しめるのです。苦しむ中にも、自ら悟ることはありませう。けれども心身一如の境に到るには、身も安く、心も安くといふので

二元の行



なければ、まことの道とはいはれずまい。これもまた現今の國語教育に頗る似通つた所があります。國語教育の目ざす所は、文章談話の心に響く所によつて、内なるまことの世界の次第に明らかめられる所でせう。それは文字・語句を機縁として、目ざす所に到達することは、言ふまでもありませんが、文字・語句を主要のものとして取扱ひ、それを超ゆる事が出来ないとしたら、國語教育は一種の苦行に終るものではありますまいか。かやうに申しても、私は決して文字・語句を輕視する者ではありません。心内の響の尖端として、文字・語句を見たいのです。文字・語句を單に文字・語句として切離さないで、文字・語句の上に、心の響を見たいのです。聴きたいのです。

## 釋迦の易行道

釋迦は六年間の苦行をさらりと捨てて、普通の生活にお歸りになりました。食ふ時には食つて、寝る時にはお休みになりました。さうして一心に内省につとめられました。四月十五日から靜坐しはじめて、十二月の八日

には成道なされました。即ちまことの道をおさとりになつたのです。修行は特殊のものではなくて、生活そのまゝが修行なのでせう。私には、まことの道がいかなるものであるかは、説明は出来ませんが、釋迦にあれ程迷の種でありました生・老・病死が、悟つてみれば、道の當體で、忌むべきものでも、厭ふべきものでもないことがわかりました。即ち釋迦成道の後にも、生・老・病死は依然としてありましたが、それはそのまゝに、道の姿として見る事が出来るやうになつたのでせう。これを今日の國語教育に引當てて考へますと、文章を読んで、心に響く所を諦視し、それによつてまことの世界が明朗になつて來ますと、一切の文章、一切の談話はいふも更なり、山川草木、禽獸蟲魚、日月星辰、一切萬象、悉く心の響の尖端と見る事が出來て、到る所すべてこれ樂土、自己を育てる所として、生きることが出来るのと同じでせう。道元禪師が宋にお渡りになりました時の、赤毛布物語の一に、「この外國の好



人氣の毒なことに文字を知らず」と阿育王山の典座に一本頂戴なさることがあります。後日お會ひになつて「如何なるかこれ文字」と問はれますと、典座は破顔「一二三四五」といつたといふ話があります。私はこの話を何年かかゝつて「一切萬象すべて文字なり」森羅萬象一として文章ならざるはなし」と解して、私の國語教育に對するあこがれは、一段と高まつたやうに覺えたことがあります。いよく、易行道の本體を掴み得た感が致しました。

餘談ながら、釋迦ほど自己の安心を目ざして、努力なさつた方も少いでせう。一心不安ならば、王者の富貴も、榮華も、物の數ではないと思召したやうです。生老病死の四苦に迷ひはじめ、それが問題の形となつて、「人は何の爲にこの世に生れて來たのか、我々の行末はどうなるだらうか」と、まとまつてからは、もうちつとしてはゐられなかつたのでせう。「此の上は聖賢を訪うて、教をうける外はない」と思ひ立つて、二十九歳のある夜、宮殿を拔出られた

## 釋迦修行の跡

のです。釋迦としては、こゝが迷の頂上でせうが、四苦の迷ひ方にしても、その解決方法としても、すべて徹底的です。迷ふなら微溫的な迷ひ方をせず、解決するなら安心のつく處までと思ひます。この點私に釋迦程明透な感を與へる方はありません。

釋迦の修行の跡を見る者は、かの宮殿を出給ひし時の迷の解決方法が、「聖賢を訪うて教をうける」といふにあることを見落してはなりません。さすがの釋迦でも、解決の鍵を外に求めていらつしやいます。外といへば、聖賢でも、學者でも、書物でも、皆外に屬するものです。釋迦も一旦はそれを目ざして進まれましたが、それが失敗に終わりました。ところが釋迦の俊敏は、すぐそれを觀破されました。もう人にはたよるまい。自分一人で修行をしようとなつたのです。しかし人は、因習の前には弱者です。人が苦行をするから、我も一人で苦行をしようと思ひになつたのです。釋迦でも、それが



效の無いといふことは六年の間わからなかつたのです。たゞ説を聴くと  
いふ耳學問が、よし無効の苦行ではあつても、行にかはつたことが一進展だ  
と思ひます。即ち求道の鍵をおのれに移し、求道の方法を行におかへにな  
つたのが、確かに大なる進展です。心身二元に立つての行が、心身一元の靜  
坐行にかはつて、いよく成道の曉となるのです。出山の釋迦は、まるで乞  
食坊主を見るやうです。それが八ヶ月の後には、見るからに慈悲圓滿のあ  
の肉體とおなりになつたのでせう。心に惱の一切が消滅し、不動の安心が  
確立したる人の持つべき肉體は、まさに此の如きものでせう。その後五人  
の友を手はじめとして、八十歳の高齡に及んでも、なほ衆生濟度に努めたま  
ひし高德、有難きことの極みですが、釋迦御自身からは、これもまた御修行の  
道であつた事と思ひます。世には成道までを向上門、以下を向下門といふ  
やうですが、私は向下はさながら向上だらうと思ひます。

釋迦の教  
授法

さらに餘談の餘談ですが、釋迦が下愚の者に、大法を説きたまふ教授の一  
法を述べておきます。ある所に一人の老婆がありました。一人娘をなく  
して、大層悲しんでゐました。そこへお釋迦様がお出でになりました。なぜ  
泣いてゐるのかとお尋ねになりました。すると事の次第を詳しく語りま  
して、「どうぞあなたの御力で、この娘を生かして下さい」と願ひました。する  
とお釋迦様は、よしよし生かして進ぜる。しかしそれにはなくてはならな  
いものがある。この線香に火をつけてきてほしい。但しその火は何處の  
家でもらつてもよいが、一度も死人のなかつた家でなければならぬ。それ  
さへあれば、きつと娘を生かして進ぜる」とおつしやいました。老婆は飛上  
るほど喜んで、村中まはつて火を貰はうとしましたが、一軒として死人のな  
かつた家はありませんでした。老婆はすごくとして歸つて來ました。  
お釋迦様が「どうだつたかね、火は」とおつしやると、老婆はまた詳しく事の次



第を物語りました。そこでお釋迦様は「死はお前さんにだけ限つたことではない」とよくくお諭しになりました。老婆はその時からお弟子になつて、お釋迦様のお伴をしたといふことです。行ずることが理會の捷徑です。お線香の火を求めよの取扱は、いかにもうまいと思ひます。

以上長々と書きましたのは、釋迦の大修行に於ても、難行から易行に轉ぜられたことを明らかにしたのです。過去六十年の我が國語教育は、僅に上根の者に行はれただけで、下根の者はその恩恵に浴し難き程の難行でありました。釋迦は無効と知り給ひて、六年の苦行を捨てられました。私どもも釋尊に學んで、無効と知つたら、たとひ六十年の研究でも、易行有效の一道を見つけやうではありませんか。執着固執の要は何處にもないと思ひます。

岡田先生は名を虎次郎と申しました。三州田原の人、岡田式靜坐法の創

難行から  
易行へ

岡田先生  
と私

始者です。靜坐法が漸く世に行はれむとする時、急性腎臟炎とかでおなくなりになりました。御年四十九。先生も易行道を行かれた方のやうです。私が先生にお目にかゝつたのは、私の四十の年の秋であつたと思ひます。東京高等師範學校教授峯岸米造先生が、しきりに岡田式靜坐法の功德を説かれるので、私は別に信を起したといふではなかつたが、ついつつみる氣になつて、水曜會——峯岸先生のお宅の靜坐會——に出ました。私にはもともとく繼續する肚はなかつたのでした。けれどもとうく先生の人格に引摺られて、八年間殆ど休んだことなくつゞけました。

私の身體の著しく變つたことをいつて見ると、十四貫の體重が、一年の後に十六貫になりました。それから漸次進んで、四十五六の頃は、十八貫四百といふに達しました。入門以前私は頗るいらくした性質の、怒りつほいものでしたが、それが殆ど怒らなくなりました。何を食つてもうまく、こと



に蔬菜を好むやうになりました。従来は胃病の常習犯で、私の机の上には、胃活の罐が何時も安置してあるのでした。が、静坐をはじめて以来、それに手をかける要がなくなりました。岡田先生はよく「天地皆春」とおっしゃいましたが、私の心持がそんな風にかはつて行きました。

私は今までに多少運動もやつてみたり、健康法も試みたり、薬も飲んでみたこともありましたが、静坐ほど私の身體にきいたものはありませんでした。而もそれが先生のおっしゃる通りに變つて行くのでせう。人は何といつても、私にとつて岡田先生は身體の改造、性格の改造をして下さつた有難い方でした。私は先生の前に出て「そろ／＼目をつぶつて」とおっしゃつてから「そろ／＼目のあけて」とおっしゃるまで、八年間一度も目をあけたことがありません。その證據に、私どもが静坐をしてゐる間に、先生が如何なる態度でいらつしやるか、その記憶が全く私にはないのです。水曜會の仲

間には、先生は静坐中に、子供をあやしてゐなかつたとか、峯岸先生が躍動なさるので、先生は袴の裾を膝で押へてゐなかつたとかいふ者がありました。が、私は之に話を合せる材料を一つも持つてゐませんでした。ほかの事では茶目氣の相當にある私ですが、岡田先生の前だけではいかにも素直に坐つてゐたもののやうに思はれます。

水曜會の同門に、橋本五作君といふ先達がゐりました。先生の道を九州朝鮮滿洲に擴めた方でしたが、先年なくなりまして惜しいことを致しました。橋本君は殆ど私と同時に入門し、進境も相似たものでした。私が先生に聞いてみたいと思ふことは、殆どすべて橋本君が聞いてくれました。「先生静坐にはどういふ効果がありますか」坐つてみればわかります。「身體がなぜこんなに動揺しますか」坐つてみればわかります。「静坐は幾年位すれば、その眞意が悟れますか」私を信じてお坐りなさい。「生命と静坐との關係はいかゞな



ものでせう。生命は天に任せて、我等は姿勢正しく坐るといふ道があるきりです。今から思ひ合はせると、岡田先生は門下に對して正しき身體——端坐したる身體——に、おのづから動く心を見させようとなさつたやうでした。「客に對して」どうぞお樂に」といつて、胡坐を勧めるけれども、胡坐位苦しいものはないのだ」といつて、坐を崩すことを常に戒められました。また、靜坐中に無我にならうなどとつとめてはならぬ。その心既に有我だ。何が思ひ浮ばうとも、そのまゝにしておくがよい」といつて、自らなる心の動きを尊重せられました。「無我とは心の不動のさまをいふので、耳で聽かぬことでも、目で見ないことでもない」など先生は片言隻句に、常にかうした眞理を語られるのでした。

## 先生の言

先生は多く語らない方だと思つてゐましたが、八年間膝下に侍して、教をうけたことを思ひ起してみると、随分と多いことです。「克己、忍耐、禁慾など、

人をあやまるものはない。腫物に膏藥をはつたやうなものでも、徳といふ世だからたまらない」とかく人間は、火山の噴火口に座して、それが至極の安住の天地だと思つてゐるから、始末がわるい」など當代の世相にむかつて、投掛けられる教訓には、胸のすくやうなものがありました。

又私どもが靜坐道に入つて身體に動搖を感じ、頗る道を得た者と得意がつてゐると、三年もたてば動かなくなるだらう」と初心者の慢心をいまいめられました。「この道を西洋人に行せしむるには、形式をかへればよい。端坐の形式を採つたのは、日本人が常に疊の上に住んでゐるからさ」など、何を語られるにも、實にきびくしたものでした。

低能兒教育について、先生が面白い事をお話しになりました。「さる博士の未亡人が、愛嬢一人を持つていらつしやるが、不幸にしてそのお嬢さんが低能なのだ。そこで私は、その未亡人に靜坐をすゝめたが、未亡人の靜坐が



進むだけ、お嬢さんがだんくよくなつて来た」と。先生は、小學生にもかうした事實をいくつか持つていらつしやつたやうでした。「さらにだに能力の低いものを、まはりに寄つて、かうしたら良からう、あゝしたら良からう、おもちやにするから、迷つてしまふのだよ。低能が低能と知つて、それが私ですと落着く日、それは低能ではないのだ。學校の諸教科の總點數で人を評價するなどはひどい事だね」と。私の劣等兒に關する考も、先生に負ふ所が實に大であります。

先生の言

「今の人はよく藥を飲むね。藥は力ではない。自分のからだを放埒に持ち崩して、それで病を得ると、それ醫者よ、それ藥よと騒ぐ。藥を信ずる心、既に病者ではないか。見たまへ、新聞にあれだけ名藥の廣告が出て、病者がたへぬとはさても利きのわるい名藥ではないか」と。又いはく、「病氣は氣を病むと書くだらう。氣さへ平かにしるれば自らなほる」と。「生れる時には裸

なのだ。天賦の力を信じ、これを育てない者に健全な精神、健全な身體が持つてゐるものかね。心が安きために、身が健やかなのか、身が正しいために、心が健やかなのか。たゞ靜坐一つが之を解決するものだ」と。先生のお言葉は、聽く人を擇ぶ傾がありました。日の三日でも坐つた人が、坐らうと志す人でなければ、分解して分るほど、淺いものではありませんでした。「病のある人、問のある人、不幸の人は、靜坐道では素養ある人といふのだ。その度が強ければ強いだけ、道に達することも早い譯だ。」などは、何といふ強い御立言でございます。これが素直にうけ入れられるのですから、私はうれしくてたまりませんでした。

私が一年餘、先生の前に坐した頃の事でした。ある日先生に、「先生、多少自分のことが見えだしたのは、全く先生のおかげですが、それと同時に、今まで我が物と考へてゐた物が、全部他人の物であつたとわかりまして、實は淋し

靜坐一年  
の後



くてたまりません。明日から子供に何を教へようかと思ふ程です。却つて傷ついてゐないだけ、私よりも子供が尊いと思はれてなりません」と申し上げると、さうです。全く子供の方が尊い。しかしそれに氣の付かぬ人の多い世に、それが分つたあなたは幸福だ。あなたがそんな事をいひさうだと思つてゐた。今まであなたが大切に思つてゐた物は、實は辨慶の七つ道具だつたのだね。それをそつくり下してしまつて、内から崩出て來るものを育てなさい。それを育てるには、常に緊張してゐなければなりません。少しでも懈怠の心が起つたら、進歩發達は止ります」と、嚙んで含めるやうに教へて下さいました。私はこの時以後、唯黙々として坐りつゞけました。

先生の御抱負

岡田先生は靜坐といふ一行によつて、己を見出させ、それに備はる天與の力を發達せしめて、それによつて地上に天國をうち立てようとなさつたやうに見えます。その到達點、即ちまことの世界が開けて來れば、社會萬般の

靜坐のおかけ

ことは自ら開けて、天地皆春の明朗な世界が出現するものと思召したやうです。然るに先生は御短命でした。實に惜しいことでした。おなくなりになつてから、既に十五年、世は變つて來ました。もし先生が御存生で、これを御覽になりましたら、何とおつしやるだらうなど時々思ひます。私は事ある毎に岡田先生を思はないことはありません。

私もし四十にして岡田先生におあひする機會がなかつたと致しましたら、今頃は身心共に耗盡して、もはや物の用には立つまいと思ひます。かへりみると、私が四十九までの高等師範生活は、可なりに峻峻な道でした。朝鮮の三年も、南洋の一年も、力の割に荷が重かつたので、苦しいことは苦しいのでした。が、乗りきる愉快も亦大なるものがありました。教壇行脚の十年、その中私の五十八の暮からは、家事がすべて財的に不如意、私は一時死を決した事さへありました。しかし死ぬ場所がありませんでした。その中



に死ぬる氣で一生働かうと心機が一轉しました。夜を日について働いても、萬を以て數へる債務には、まるで九牛の一毛です。時には暴力團におしかけられ、時には家財をさし押へられて、貸借關係最悪の處置に屢々あひました。時には誰が借りたのだから知らないが、といふ愚痴も、浮ばないではありませんでした。印形がものいふ今の世の中です。何事も時の災難とあきらめて、一度も私のまことの世界がかき亂されたことなく、やうく六十三まで辿り着きました。この心の平和、身の健康、なほ緊張に寸分の弛みのないのだけは、全く岡田先生の賜です。八年といへば長い年月、私のねぢくれた心、私のねぢくれた身を、素直に育てて下さいました御鴻恩は、生みの親にもましてありがたいことに存じます。父母があつてこの身はありまして、岡田先生がなかつたら、教育に専念する私はなかつたかと思ひます。因みに、岡田先生の靜坐に參する側嶽尾來尙老師について、從容錄、碧巖錄等

## 私の易行道

の提唱をうかゞひました。求道のために大なるお導きを得ましたことを感謝してゐます。これもまた私が易行道に立つ大きな足場になつたかと思ひます。

私が再び東京高師に職を奉じて以來のことを考へてみましても、國語教育の易行道を説くべき方向を取つてゐたのではないかと思ひます。勿論意識してのことではありませんが、丁度四十一の年に發表致しました綴方教授は、主として隨意選題に關することを説いたのでした。その考は三十四五から教壇に行じてゐたのですが、目ざすところは課題とか、系統案とか、他よりする綴方教授を、内より懇求する書かんとすることによつて導かうと考へたのでした。四十五の年に發表致しました讀方教授は、主として自己を讀むといふことを取扱つたのでした。今でも嚴しい理窟攻にあふと、説明は出來ないのですが、あらゆる文章を讀むのは、自己を讀んでゐるのだ



といふ信念には、少しも狂ひがないのでございます。讀む自己を自身をよそにしてゐた従來の讀方が、あさましいものに見えたのでした。五十三の年に發表致しました第二讀方教授は、主として師弟共流といふことを取扱つたのでした。教師中心だとか、兒童中心だとか、随分初等教育界の問題のやうでしたが、教育の仕事は、弟子は師に導かれて育ち、師も亦弟子を導くことによつて育つのです。その融合一致するところに、共鳴もあり、相愛もあり、共に育つ樂しみもあるのだと考へました。この境地に到達して、初めて眞の教育が行はれることを説いたのでした。爾來十年、以前と全くちがつた生活の上に立つて、國語教育易行道を發表するのですが、私としては私の育つて來た跡を記録したのに過ぎません。貫くものは、内へといふのと、「行じて」といふ外にはないので。科學的論據といふものから、この國語教育易行道を論究して下さいたら、恐らく空虚見るに堪へないものでせう。

旅は一種  
の讀書

しかし讀者が少しく觀點をかへて、御自身の育つて來なすつた點から、その惱みやその喜を併せて御覽下さつたら、多少は御共鳴下さる所もあらうかと存じます。とにかくにも、この書を御覽下さる方々は、虚心坦懷であることを特にお願い申します。

一心の置き所さへ定まれば、旅は一種の讀書です。目で讀み、口で讀み、手で讀む讀書の外に、足の裏で讀む讀書を加へていたゞきたいと思ひます。目・口・手で讀む書物は、文章になつてゐますが、足の裏で讀むものは、すべて文章の素材です。必ずしも旅に出なくても、日々の生活それ全部が文章の素材です。文章によつて、讀方の修練を経たものは、足の裏によつて、その素材を讀みとることが出来なければなりません。私はかういふ事を思ひはじめると、私の心は、五十年餘の昔、一丁字も解し得ずして、足の裏のみによつて讀破した丹波竹川の郷土をさまよひます。私の持つてゐます知識の核に



は、郷土竹田の山があります。川があります。金持があり、貧乏人があります。お宮があり、お寺があります。うそつきがあり、正直者があります。目白があり、山雀があり、鯰があり、鯉があります。蛇があり、蜻蛉があり、犬があり、牛があります。蓮華草があり、薄があり、松があり、檜があります。牡丹があり、櫻があり、萩があり、野菊があります。挙げ来れば、大小、形状、色澤から、活動状態まで、一として極彩色でないものはありません。私は餘生のある中に、一月郷土竹田に歸つて、その土、その森、川も、山も、人も、動物も、この世の外に思ひ出に、我が心に響くまゝを書き出してみたいと思つてゐます。私の持つてゐるものは、先生方もお持ちであり、先生方の教へ子も、亦持つてゐるものでせう。國語教育易行道はこの國語の素材の世界から、足の裏や手の力を働かせて踏出したいと思ひます。さうして歸りつく所も、やはり素材の世界で、それを深く讀取るまでに育てたいと存じます。

教育のことは、どんな瑣細なことでも、一心に響くことでなければならず、その響によつて、一心の根柢から動き出すことでなければならぬと思ひます。ところが従來の教育は、一心の根柢、即ちまことの世界に響くものが乏しくて、諸教科の教育的價值として、強調せられてゐるやうな事が、果して事實として行はれてゐるだらうかと思ひます。多くは技能の末梢に馳せて、一心の根柢に歸ることを忘れてゐるのではあるまいかと思ひます。心を静めて小學教育の事實を御覽なさい。八大教育思潮として、好景氣時代に唱へられた教育の華は、つひに實を結ばずして、唱へた人も老い、世間も飽き、これに追隨した人も今はその形骸を墨守してゐるに過ぎません。従つて今の小學校は、さながら塵塚の姿であります。どこに生氣ありやといひたい。どこに人を動かす力ありやといひたい。多數の讀めない子、書けない子を擁して、徒らに個性を説き、素質を説き、環境を説き、制度を説いて、その



成績の餘儀なきを明らかにしようと思つてゐるに過ぎません。私は愛兒を託してゐる罪なき親のために、悲しみます。

私はこゝに敢へて申します。讀めない讀本ならば、文部に改訂をせまるがよろしい。書けない讀本ならば、書ける讀本を文部に要求するがよろしい。けれども今の讀本が、果して讀めない程、又は書けない程、むづかしいものでせうか。幸に我が全国の同志五千は、その學級に於て、殆ど讀めない子、書けない子をなくしてゐます。同志の多い學校で、私の知つてゐる範圍に於て、既に數校可なり大きな學校ですが、讀めない子供をなくした學校があります。五千の學級、學校として數校、この實蹟をあげ得たとしたら、三萬に近き全国の小學校、一校十學級として三十萬學級の全兒童が、悉く讀本を讀み、かつ書き得ることは、一二年が程になし得らるゝこととせう。全國兒童が嬉々として讀み嬉々と書く日が來ましたら、よしその説の日本に生えぬ

いたもので、舶來品でないとしても、科學的論據がないとしても、教育的事象としては、まさに叩頭稽首して見るべきものではあるまいかと思ひます。

科學はかういふ事象をこそ、究明すべきものかと思ひます。

そこで國語教育易行道とは何ぞといふことになります。釋迦も二元の苦行を去つて、靜坐の樂行に歸り、一心の上に日々に起る心の迷をしりぞけて、悟りの道を求められました。岡田先生も、靜坐による正しき身體に、正しき心を見させ、それによつて一切の苦患を脱して、天地皆春の明朗な世界に伴はうとなさいました。私はこのお二方の修行の足跡から、稚き者は稚きながらに、何事にもまづ一心の響を求め次にその根柢のまことの世界に遊ばせたいと思ひます。それには兒童の夢中に事を行するあの力によつて、次第にまことの世界を行得するやうにしたいと思ひます。要するに歸結を一心に求むることと、一切を行得することを、二大原則として、大安心の境



地に到らしめたいと思ひます。兒童をして釋迦の後を追ひ、岡田先生の後を追つて、その境に安んじ、その土に樂しむ人たらしめたいといふのです。

かう述べて來ると必ず易行の義如何との問が出ませう。私は之に答へて、兒童を御覽下さいと申しませう。兒童ほど育つことを喜ぶものはありません。而もそれが完全といふことを目標としてゐるのが、尊いと思ひます。さらに私は先生御自身を御覽下さいと申しませう。小學先生ほど、自己の向上について、あこがれを持つてゐる方はありません。常に稚き者に接觸せられてゐるせるか、初等教育界には、他社會には見られない若々しさと、憧憬があります。そこで問題は急轉直下致します。兒童は常に育たうと思ひ、偏に師の御導きを希つてゐます。師も亦育たうと思召してゐるのです。その上に若し、兒童をよく育てる事が自らを育てる唯一の方法であるとお考へになつたら、何處に困難な所がありません。その手段方法は未

です。師の行が常に一心に歸結し、安心を目ざして進まるゝ所に、如何で弟子が、一心に歸結し、安心に到達することを願はないものがあります。苟も眼が他につけば難行となり、内につけば易行となるのです。但し師の御心が小學教育にあらずして、名にあり、金にあり、政治にあり、法律にあり、競技にあり、音楽にありとしたら、それは私の知らない領域です。小學教育は片手間仕事で、間にあつて行くやうないかさま事ではありません。私はかく一言する外に言ふべき言を持ちません。



## 四 讀 方

## 國語の力

私は今玉川温泉に籠つて、唯今國語教育易行道を書いてゐます。浴客は多く近郷の老翁老婆、私が最若老の部であるといふのでも、浴室の光景は、大凡想像がつきませう。初對面のその時から、お互に明つ放しの身の上話時に花を賞したり、時に雨をくやんだりしてゐるうちに、お互に人柄をまで知つてしまつて全く舊知のやうです。その人物鑑定が甚だしく間違はないのが不思議です。私はひそかに國語の力といふものは、恐ろしいものだと思ひました。國語を思想交換の具などいふのは、最低限度のことで、微妙な響のその底には、故意にも、體裁にも、かくしおほせぬものがあると思ひます。國語教育の研究には、この生きた言葉を、生きた耳で聽く響からはいるのが大切だと思ひます。

## 自分の言葉に泣く

私は旅行中、汽車の中で日を暮すと、軽い淋しさに襲はれるのが常です。窓に倚つて外を見ると、外はとつぶり暮れて、自分の顔だけがガラスに映ります。最初は變な顔だなど思ひます。しかしこれでも世界に唯一つしかないのだと思ふと、この顔をよごさないやうにといましめつゝ、六十幾年生きて來た事を思ひはじめます。又こゝが父に似てゐるとか、こゝが母に似てゐるとか、亡き父母をしのび初めると、いつとはなしに西國巡禮の歌が出て來ます。必ず那智山と紀三非寺はとんで、三番の粉河寺が出来ます。「父母の恵みも深き粉河寺、佛のちかひたのもしの身や」と、少々鼻にかけて、小さい聲でやると、そこに稚い鳴門お鶴の巡禮姿が現はれて來ます。すると聯想は妙なもので、その後には必ず寺子屋の「いや何源藏殿、申しつけてはおこしたれど、嘸や今はその際に、見苦しい死に様をいたしたで御座らうのう」の、松王のせりふを思ひうかべます。「いや若君菅秀才のお身代りと申しき



かせたれば、首さしのべにつこり笑うて」の源藏のことばも出て來ます。「あ  
のにつこり笑うて」松王のことば、それをなるべく松王(父源藏)の聲色のや  
うに、口ずさんでみると、後は松王のさみしい笑になります。宮仕へする者  
の意地と誠が思はれて、私は遂に泣いてしまふが例です。私はこの時國語  
の力の偉大さを思はない事はありません。現に私の目に見えてゐるもの  
は、白髪頭の私の姿だけです。しかし松王のことば、源藏のことばは、私が今  
までに見た俳優の中の最も適任者を拉し來つて、それを三等車の窓ガラス  
に踊らせませす。私はかうした幻夢に、夕方の寂寥を越すと、あとは本職の國  
語教育問題になつて、だから口語を尊重しなければならぬなど、口走ること  
があります。馬鹿なことだとお笑ひにならないで、皆さんの口語をたゞち  
に取つて研究の資として御覽下さい。不急の書を読んで、首をひねるのよ  
りも、どれほど生々とした知識を得るか知れません。私は、自分の口語に内

省の興味を持たないやうな人が、何で古人の言葉や、子供の言葉に興味を持  
てようかと思ひます。徒らに言ひふるした言葉を、鸚鵡のやうに口眞似し  
て安んじようなどとは、たしかに人生の冒瀆です。與へられた創造の天賦  
をどうするのです。それには正眞正銘、蒐集立證の要なき自分の言葉を  
内省して、そこを足場にしっかりと踏み締めて、それから他人の書をたどるなり、  
先哲の言をあさるなりしたら、よいではないでせうか。これが即ち私のい  
ふ易行道で、己を忘れて他に縋るから、そこに面白くもないことを、克己、忍耐  
でやらねばならぬ難行道を生じ、上根の者は、どうにかかうにか、枯骨凌々と  
して切抜けても、下根の者は、疾くに落伍してしまつて、やくざものになつて  
しまふのが世の常です。若し今の世に、教育が作つたやくざ者を擧げたら、  
あまりにもその數の多いのに驚きませう。易行のたしかな一道があるも  
のを。心なき人によつて捏返された事をしみく、悲しみます。



私は國語教育の易行道に於ては、まづ口語に目をつけなければならぬと思ひます。而してその口語がまことであるか否かによつて、言葉としての價値に差を生じ、それによつて教育し得るか否かが岐れるのだと思ひます。是と信ずることは、徹底是といひきらなくてはなりません。非と信ずることは、徹底非といひきらなくてはなりません。そこに言葉としての價値は存し、そこに言葉としての教育力を有するのです。即ち是々非々の言葉、眞實の言葉は、それは單に言葉ではなくて、その人です。必ずしも「文は人なり」といふ言をかるまでもございません。文章談話はすべて作者話者の人格によつて讀まれたり聽かれたりするものと考へなければなりません。そこで眞實を語らなければならぬといふことが、國語教育の第一の問題となり、こゝに聊かたりとも狂ひがあつては、最早言葉でもなく、人でもないことになると私は思ひます。いつの頃よりか、言葉の眞實性が減じて、語るも

の聽く者共に山をかけたたり、割引したりすることが行はれて來ました。大事な國家の豫算にすら、單價に疑をさしはさむ餘地があるなどは、誠實を缺く事の甚だしいものではないでせうか。言葉の眞實性が低減した結果として、この頃「何處までがほんたうだらうか」といふ事が、日常の對話にさしはさまれるやうになりました。全部ほんたうであるべき談話が、眞實さの限度を反問されるやうになつては、國語によつて、人を教育するといふ點には、大なる支障であると思ひます。その感化か、此の頃都市の子供は、よく「ほんたうかい」といふ言葉を平氣でつかつてゐます。實に聞捨てならぬ言葉です。中學生になると、もつと積極的に「嘘つけ」と人格を無視したことをいつて平氣でゐます。私はこの言語の本質に於ての大動搖を、今日に於て改めなかつたら、東方の君子國といはれ、言靈のさきはふ國といはれた光が、年と共に薄らいで行くのではないかと案じます。言葉の亂れていつた國



家の末路は實におそろしいものだらうと思ひます。

私が朝鮮にゐます頃隨分よく旅行をしたものでした。郡廳所在地の町の入口には善政碑の羅列してゐるのを度々見ました。——今は大抵取片付けて學校の裏などに集めて立ててある所もあります。——善政碑とは、爲政者が善政をしいたが爲に、人民は鼓腹擊壤その徳を謳歌した記念に、人民が立てたものなさうです。それが仕入れの品物のやうに、澤山あるのだからいやになつてしまひます。私はよく案内者の鮮人に「これだけ善政をしいて國が疲弊する道理はありませんね」といつたものでした。すると彼は苦笑して「全くです。この中には爲政者の着任以前に立てたのもあるといふことです。それが誅求防止の一策だともきいてゐます」といひました。まことによつて價値の生すべき善政碑が政策に利用せられては善政と稱するものによつて衰亡する國家が出来ないとも限りません。勳章が潰職

の問題になつたのなども國家の大なる汚點です。悪事を働いたものが罪せられるのは當然ですが、罪しても一度まことにゆるぎを來しては何とも致し方のないものです。言語のやうに、まことの裏打によつてのみその力を生ずるもの、それが根本的に亂された影響は實におそろしいものがあると思ひます。私は刑法に國語を亂るの罪といふのがあつてよいのではないかと思ひます。豫審廷の陳述を公判廷に全然くつがへすのなどは、まさにそれに當るものでせう。二枚以上の舌をつかふ者の罪をたゞしたいと思ひます。さうなると、日々の新聞廣告などの中にも、誇大に過ぐるものは、それに觸れることとなりませう。國語を虚偽に悪用する者は、よしそれが操觚者であつても、宣傳者であつても、その國語の主である國民が、その不當を攻めるだけの眞面目さを持たなければなりません。それにつけても我が國語調査會が、漢字や假名づかひの末に齷齪して、日に月に蝕まれ行く國



語の本質に、一指も染め得ないことを、私は國民の一人として、甚だ遺憾に存じます。

## 對大勢策

若し「大勢の赴くところは、如何とも仕方がないよ」といふ人がありましたら、私は「私は」といつて、ピラミットの後を追ふのが望ましいのですか」と反問致しませう。當代の人は、小さい理窟をいふ癖に「大勢」といふ様な事になると、魂消てうつちやる傾があります。考へてもみて下さい。大勢は誰が作つてをるのでですか。九千萬國民の心の傾ではありませんか。若し九千萬國民が自分の持つてゐる國語の亂れ行くのを、喰止めようといふ自覺が内にきざしたとすれば、大勢は明日にも改るものではありますまいか。事はとやかく面倒に考へないで、國語調査會を筆頭に、國語を愛重する者、ことに國語教育に携はる人々が、その自覺の喚起につとめたら、案じるよりは産むが易いのが事實が現出させよう。名譽の戦死も忠義、口にまことを語るも忠義、殖

## 小學教育者

産興業も國家隆昌の道、國語の使用をまことならしむるも、國家隆昌の永遠の道と考へさせたいと思ひます。

國民をして、國語使用に關する自覺を喚起せしむるに、最も有力な地位にあるものは、小學校の先生です。小學先生は、如何なる場合にも、おのが使用する言葉のまことに缺ける所のないやうに努めなければなりません。おのれを監視するものはおのれです。人は如何にまことしやかに聽いても、まことに動搖のある言葉はまことの世界に暗い影がさして、おのれが先づ知つてゐます。それに氣付いた場合には、之を訂正するなり、今後かゝることのないやうに戒しめるなりしなければなりません。この事は言つては譯もない事ですが、つい世をうか／＼と暮して來たものには、たしかに一苦勞です。考へ様によつては、中々に峻烈な修行です。岡田先生が逆呼吸を教へて、一呼一吸に注意するやうにと導かれたのも、深いお考へのあつた事



と存じます。

小學校の先生に口ことばによるこの修行氣分が起つて來ましたら、説かなくても命じなくても、兒童はよく口語を尊重する義を悟るでせう。その上に讀方綴方の時間、修身の時間などに、折々言葉のまこと、言葉の尊嚴を説いたら、小學を卒業する頃までには、國語に對する自覺のたしかな少年少女が出來上りませう。今後の國民は、殆ど全部が、小學校の先生のお導きによつて、人になるのです。全國三十萬の小學先生が結束して、「まことを語る」一點に猛進したら、そこに純正國語の所有者たる日本國民が出現するだらうと思ひます。

善を行ふ  
聖地の  
正義の  
苗床

私は現社會に於て、善を行するの聖地、正義の苗床といふ場所を求めたら、恐らくは小學校以外に、多くはあるまいと思ひます。國家が定めた諸教科の學習を日々の行として、向上の一路を辿つてゐるのが、小學兒童です。何

事も正しく、何事も完全にと志して、努力を惜しまない所は實に美しいものです。その志すところを、常に諦視せしめて、それ〴〵に具有する「まことの世界」に遊ばせたら、春の日に草木の芽の生立つが如く、素直に伸びて行くものと思ひます。ところがいつの頃よりか、小學校が知識技能の傳習所やうになつて、師弟の間が知識技能の授受によつて毒せられてゐる傾があります。勿論行の結果は、知識技能の收得にもなるのですが、行の如何を問はずして、その結果のみ論議してゐるのは、歎はしい事です。小學校に於て眞に正義を愛し、聖地に生きる體驗を得させなかつたら、何れの處にさうした喜が得られませう。小學教師が自分と正義の護持者、聖地をあづかる修行者と考へなかつたら、師とよばれ弟子と呼ぶ義までが、極めて淺薄なものになりはすまいかと存じます。

眞の言葉

私は今の小學兒童が、卒業間際に學習する「勝安房と西郷隆盛」の課の對話



を、次に書抜いてみませう。

「官軍方の御意見はどのやうなものか存じませんが、拙者の考へる所では、今日日本の周囲には諸外國が様々の考を持つて見てをるので、うか／＼と兄弟垣にせめいでゐたら、日本全國にのしをつけてどこぞの國へやつてしまふやうな事にならぬとは決して申されませぬ。之に比べれば、幕臣の身としては如何がな申分ではあるが、徳川家の存亡などは言ふにも足らぬ小事でござります。」

「しかしたとへにも申す通り、一寸の蟲にも五分の魂。徳川侍のなまくら刀にも少しは切れる所がござりませう。官軍方の思召通り一押にはゆかぬかも知れませぬ。すると其のうちには又思の外な尻押なども現れて、事めんどうな筋合にならぬとも限りませぬ。拙者は、此の談判がよしどのやうに決着するにもせよ、さやうな事になれかしとは毛頭考へませぬが、大勢は人力の如何ともしやうのないもので——。」

「此の邊の事情をよく／＼御推察下されて、特別の御仁慈を以ておだやかに事のまとまるやう今一應の御評議下さることになりますれば、誠に日本國の幸でござります。又延いては徳川家及び江戸百萬の民の仕合はせ、これは申すまでもござりませぬ。何分今一應の御評議を推して御願ひ

申す次第でござります。」

「よろしい。とにかく明日の總攻撃見合はせの一事だけは、拙者一命にかけて御引受け申します。其の餘の事は拙者の一存にはまゐりませぬから、追つての沙汰をお待ち下さい。」

明治元年三月十四日、明日に迫る江戸總攻撃を前にして、勝安房と西郷隆盛の談判の主要部が、前に掲げた四つの談話であります。前三つは勝安房ので、終の一つが西郷隆盛のです。當時天下の大勢は、討幕と佐幕に分れてゐました。討幕は尊王を名としたから、大義に於て勝利者であります。したがつて、向ふ所敵なく破竹の勢を以て、今や江戸を一舉に屠らうといふ地點にまで來たのです。しかし討幕にしても、佐幕にしても、今から見るから、正邪曲直、一絲亂れず考へられますが、當時の「とことんやれとんやれな」と歌つて箱根を越えた者に、それが一人残らず、明らかによくわかつてゐたでせうか。まして惨敗の黒雲が頭上に舞下らうとしてゐる佐幕黨に、國の將來



を如何と考へてゐた者は勝さん一人か、若し他にありとしても、寥々たるものではなかつたかと思ひます。この時に當つて、この兩雄の會見は、敵味方といふよりも、寧ろ之を超越して、國の將來を如何といふまことの世界に立つて、話しあつてゐるのではありますまいか。そこには徳川をと、官軍をと、いふ私心がさらに見られないのです。私はこの兩雄の話を聽いて、國を思ふまこと以外に、何物も聞えないやうに感じます。勝さんは頼み手、西郷さんは頼まれ手ですから、勝さんの言葉の多いのは、その所思を明らかにする必要からです。然し西郷さんも、最初に「大きな眼でじつと安房の顔を見つめながら、だまつて聽いてゐる。」とあり、次には「だまつてうなづいた。」とあります。すべて勝さんの意見を承認して、いよく「よろしい」となつたのですから、言葉は短い、がこの短い言葉の中には勝さん以上のものが籠つてゐるともみられます。私はそんな心持で讀むせるか、挿繪を見つめてゐる

ると、西郷さんは討幕方の誠の結晶、勝さんは佐幕方の誠の結晶、それがこの一室に會して、融合一致、まことの世界が出現してゐるやうに見えます。卒業間際の兒童に、言葉の使ひ方としては、如何なる場合にも、誠の外なき事を、教へてゐるのだと思ひます。まことを語るの根本を逸したら、國語教育はつひに成立しまいと思ひます。

國語教育  
の所志

尋常一年  
生

言葉も第一義、行も第一義、かくしてまことの世界に安んじさせることが教育の眞意義であり、國語教育の志す所であると思ひます。

尋常一年生は思つても懐かしいものです。新しい靴をかけて、新しい草履袋をさけて、入學して來た一年生は、揃ひも揃つて、鳩が豆鐵砲を食つたやうな顔をしてゐますが、よくよく考へてみると、彼等はたゞ小學生として存在だけではありません。彼等を圍繞する幾多の事情の纏繞してゐることを知らねばなりません。それは小學先生が多く見落していらつしやる



## 貧富

やうな事です。

貧富といふ問題が、稚き彼等にもまつはつてをります。今までは父母の許にゐて、常に抱いてもらつてゐる感じに育つて來たのですから、他と比較する必要もなかつたのですが、さて學校といふ小社會に出てみると、比較しようとする心はなくても、自然と比較しなければならぬ機会に出くはすのです。俄かに雨の降つた日、誰彼は迎への人が來たのに、自分は先生に傘を貸していたゞいて歸つたといふことが、一つの疑問になつて來ます。着物のよしあしを見分けるのは、やゝ大きくなつてからとしても、お辨當を學校で食べるやうになつて、たゞ嬉しさに開く辨當箱の中にも、貧富は明らかに見なければならぬ日が來ます。貧富といふ問題は、教師の力で如何ともし難いことですが、貧は貧に安んじ、富は富に安んずるといふ躰は、教師の心構一つでどうにもなることです。極貧の者には、學用品の給與といふこと

も、悪いことではありませんが、私の經驗からは、成るべく給與になれさせないやうにと祈ります。この頃流行のやうになつてゐる給食なども、稚きものの純潔な性格を破壊しはしまいかといふ事實が往々あります。特別の事情ある場合はとにかく、普通の場合人の情に生きるといふことは、恥づべきことと知らせたいと思ひます。物で救はないで、心で救ひたいと思ひます。

餘談ながら、貧は貧に安んじといふことは、貧しくても、それを恨みかこつ事なく生きるといふことです。よく分りますが、富は富に安んじといふことは一體どういふ事かと疑ふ方がありませう。之が教育上とんだ間違を生じてをります所で、貧者を貧に安んぜしむるよりも、富者を富に安んぜしむる事が、手がかゝるのです。富者は、その大人と子供とを問はず、金といふ一種の力の所有者です。空氣銃がほしい。自轉車がほしい。寫眞機が



ほしいと、山のやうなる慾望が常に内に起つてゐます。その慾望が、三度に一度は達せられますから、それが次の慾望を摘發して、常に不安々々に日を送るものです。玩具などもなるべく兒童の創作工夫によつて得させるやうにしたいと思ひます。作つてみれば、物を尊重する心も起り、努力の尊さも悟り、そこに人間としての尊い鍛錬をうけることになります。全く一舉兩得の道です。貧富の差別を撤して貧者、富者、それ〴〵に安んずべき道を説くのは、兒童期に限るのです。自分の努力の上に引下して來れば、人は無差別です。感謝することもよくわかります。得られない物をむやみに得ようとする事は、内より之を押へなければなりません。得て満足すると共に、得られないで内の満足を得ることも知らせなければなりません。

一年生の背後に宗教のあることを知らなければなりません。兒童の人々々が佛教であり、耶蘇教であり、神道であり、大本教であり、天理教であり、

人の道であることを思はなければなりません。父母に連れられて、神社、佛開教會等に参拜した場合、何かは知らず、心に宗教の芽生えてゐることを思はなければなりません。それが宗旨宗派の何であらうとも、人間にとつて尊いものだと思ひます。うっかりすると、その若芽を摘取つて、再び芽生えしめないやうにする事があります。私の父は佛教信者で、曹洞宗に屬してゐるたものです。ある年四國巡拜を思ひ立つて、郷里を出てから、歸りつく迄に五十三日を要しました。この事があつて以來、私は毎夜父と共に、お佛壇の前でお勤めをするやうになりました。夏は必ず父の背をあふいで、蚊を追ひました。小學校の稍上級になつた頃、修驗者の家に育つた先生に受持たれて、しきりに佛教の非難を聞かされました。「山陽外史は、僧は乞丐の徒のみ」といつてゐるではないか」といはれたのを、今もよく覚えてゐます。この時から私の看經は、ぱつたり止みました。私は幸にして十六七の頃、一つ



年上の安立洞順といふ友を得て再び佛教に歸依するやうにはなりました。が、今なほ禮拜する對象が分らない程のこぢくれ者になつてしまひました。小學校の先生は、御自分の信仰が何であつても、他を非難してはなりません。唯人は自分以上のものを信することがなければ、安んじて生きられるものではない。それが神であつても、佛であつても、道であつても、法であつても、信するその事が尊いのだといふやうな心持で、兒童を率ゐなければならぬと思ひます。既成宗教の何を信するといふ事はなくても、教師は一つの安んずるものを持たなければならぬと思ひます。

## 父母

父母の職業・趣味・性格及び政黨政派の末に至るまで、すべて兒童にからまつて來る問題です。その間に處して兒童を率ゐる天職を全うするには、おのがまことの世界に不安なきを期して、争ふことなく、自己を育てる肚をきめておかなければなりません。兒童と共にまことの道を求め、まことの世

## 國語力

界に安んずる事のみ、教師に許されたことかと思ひます。

尋常一年生の持つてゐる國語の力は、實に偉大なものです。その力が特定の場合に教へられたといふのではなく、隨時隨所にて學んだものから、愈々驚いてしまひます。持つてゐる語数が三四千だといひますが、それを自由に使ひこなすのですから、何にしてもたいした力です。三四千語の收得使用が、すべて耳と口とを機關としたもので、收得使用共に相當の訓練を経てゐるものです。六年かけて、十二冊の讀本が讀めるの讀めないのといつてゐる私には、まるで神業かと思はれる程です。考へれば考へる程、兒童は偉大な力の持主です。私のたまらなく嬉しいと思ひますことは、兒童の言葉は單なる言葉ではなくて物です。物はまた單に物ではなくて、そのままに言葉です。「坊やお出で」といへば「はい」と答へて、坊やは走つて來ます。ほちを見ると「ほちよ來い」といひます。形式と内容の間に寸分の



隙がありません。話すことは聴くと直ちに分ります。讀むことは聴いて直ちに解します。私は一年生のこの尊い姿を永久に保護したいと思ひます。綴方が伸びると共に考へたことは直ちに綴ることが出来るやうに、活潑なものでありたいと思ひます。即ち音聲による國語でも、文字による國語でも、響の聲に應ずるやうにありたいと思ひます。

さらに入學以前の兒童の國語學習について頭の下ることは、語彙の極めて貧弱なものにも關らず、根掘り葉掘り物をきいて飽くことを知らないことです。分るまいと氣遣ひつゝ語つても、一心に之れに聴入ります。又何か話してくと話をせがみます。さうして同じ話を幾回繰返しても、それを少しもいとひません。熟するにつれ、理會が進むにつれて、悲しきには泣き、をかしきには笑ふやうになります。さうしてすくくと自分を育てて行きます。私は入學以前の自然の國語學習と入學後の國語學習を比較して、

入學以前  
の國語學  
習の態度國語教育  
易行道

私はおそろしいやうに思ふことさへあります。兒童は入學以前既に國語の力によつて自己を育てた體驗者であります。その體驗を強く生かして自己を育てるやうに仕向けるのが極めて大切なことであります。

國語教育の易行道は、こゝに目をつけて、まづ兒童の語る力、聴く力、求めて育たうとする力を伸ばして、その中に讀む力、書く力を得させようといふのです。こゝが皆讀皆書の第一歩で、皆話皆聴のあとを追つて、徐々に進んで行かうといふのです。

自然の學  
習

若し五六歳のお子様をお持ちの方がありましたら、試みに小學國語讀本卷一を買つて、あづけて御覽なさい。必ず挿繪を順繰に見て行きませう。繪に對する慾求が飽和點に達すると、それから讀むなり、書くなりいたします。私はこの順序を、尋一最初の教授に取り入れてみました。次の記事は、同志同行第四卷第一號に、反古籠と題して載せたのですが、その重要な部分だ



けをこゝに轉載いたします。

阪神間住吉の甲南小學校は、校長堤恒也氏をはじめ、六名の先生方、全部同志で、私はこの地方を行脚すると、半日或は一日遊ばせてもらふのです。昭和八年四月といふと、小學國語讀本卷一がはじめて世に出た時、丁度六日に甲南小學校を訪ひました。すると、よい折だ、一時間新讀本を取扱つてといふことで、四日に入學したといふ兒童の前に立ちました。

「美しい讀本を出して下さい」

「こゝを——櫻のところ——を開いて、繪を見て下さい」

「こゝは何ですか」

「さくら」

それから順繰りに開いていつて、「こゝは何ですか」とたゞみかけて、「いぬ」「へいたい」「おひさま」との答を得ました。私は悦に入つて、「ほゝう」とやつた所が、そ

サクラの  
教授

れが利いて、情性に拍車をかけました。例によつて、「こゝは何ですか」をたゞみかけて、又「はた」なのはな「かけつこ」うんどうくわい「あかちゃん」はと「の答を得ました。老生獨特の「ようし」が答毎に出るので、教室内の空氣は次第にしんみりとなりました。

また最初の頁にもどつて、「こゝで一番すきなものは」と問うて、「さくら」といふ答を得、又例によつてたゞみかけて、「いぬ」から「はと」まで進みました。一瀉千里といはうか、快刀亂麻をたつといはうか、實に痛快でした。そこで私がよみました。

「さいた　さいた

さくら　が

さいた」

「こい　こい

四讀　方



しろ

こい

「すすめ　すすめ

へいたい

すすめ」

右のやうに各の文を三聲に、三回讀みました。兒童は大部分讀本を見まもりながら聞きとれてゐました。——易行道のねらひからいへば、耳が働いてゐれば、それで十分な譯です——「この三つに似た所がありません」といつてみたが、答へる者がありませんでした。「あぶない〜」ときよつとして、その間は自然消滅となりました。

「書いて下さい。雑記帳のどこにでもよろしい。書けなくても泣いてはいけません。」

サイタ

サイタ

サクラ

ガ

サイタ

書き終へて、兒童の書いたのを見てまはりました。二名は板書のやうに書いてゐました。二十八名は全部一行に書いてゐました。みんな雑記帳のはじめから書いてゐました。

「もう一度書いて下さい」

見てまはると大體書けてゐました。私は全く嬉しくなつてしまひました。

「さ、鉛筆を置いて」

四讀　方



「これを三聲で読んで下さい」

「サイタ サイタ」

「サクラ ガ」

「サイタ」

私は子供と共に三回読みました。しかし児童の聲ははづみのない低い調子でした。

「大きい聲で読んで下さい」

児童の聲はやゝ力づよくなりました。私はいゝ氣になつて、

「この中にうれしいやうな所は」

「さくら」

これも亦あぶないくゝ自然中止となりました。

「さくらは何處にありますか」

児童は黙つて私の後にある掛花いけの彼岸櫻を指してゐます。私はふりかへつて「ほゝう」と詠歎。間よろしくあつて、

「さいた さいた さくら が さいた ですね」

といつて「この外にはありませんか」と聞くと、児童は又無言のまま、窓の外の櫻の樹をさしました。私はまだ蕾のかたいその櫻の樹を見て、

「これは『さいた さいた』ですか」

「いゝえ」

この否定の聲は、初めて児童らしく大きくなりました。私は直に

「これはまだ さかん さかん ですね」

といひますと、左側の後方に聲あり極めて低いのですが、

「さかん さかん さくら が さかん」

私はこれを聴くや直ちに鸚鵡がへしに、



「さかん さかん さくら が さかん」  
と大きな聲でいひました。児童はどつと笑ひました。教室内は一段と和やかにになりました。

この時私の心に閃いたのは、  
咲かん、咲かん、櫻が咲かん。  
咲くよ、咲くよ、櫻が咲くよ。  
咲いた、咲いた、櫻が咲いた。  
散るよ、散るよ、櫻が散るよ。  
散つた、散つた、櫻が散つた。

如上の五つの文でした。一步踏込で取扱つてみようかとも思ひましたが、その勇氣は出ませんでした。

「さ、一しよに読みませう。大きい聲で読んで下さい」

児童の聲は、力あるはれやかなものになりました。私は嬉しくてたまりませんでした。尋常一學年讀方教授の第一時は、たしかに成功したと思ふと、泣けさうで困りました。

小學國語讀本卷一が、文から出發致しましたことは大英斷でした。もとの尋常小學國語讀本の卷一編纂の時にも、これが問題となりまして、私はその頃編纂の事務を囑託されてゐましたので、文からはいるべきだと、所信のある所だけは申し上げたのでした。それはつひに用ひられないで、「ハナ」「ハト」「マメ」「マス」「ミノ」「カサ」「カラカサ」七語が、單語の申譯として名残を止めたのでした。しかしその後に出た文章といふのは、「カラスガキマス。スズメガキマス」「ウシガキマス。ウマガキマス。ウシトウマガキマス。」「ハサミガアリマス。モノサシガアリマス。ヒノシモアリマス」といふ存在をあらはすもので、これならば躍動のないことに於て、單語と擇ぶ所がありません。今



度の小學國語讀本は音調をいのちとして「サイタ サイタ サクラ ガ  
サイタ」と、頭に「サ」脚に「タ」の同音「サイタ」の同語を三つまで入れて、文を出され  
ました。監修官の腕前は實に見上げたものです。私は異つた立場からで  
したけれども、朝鮮讀本と南洋讀本には、聲調を工夫しておきました。それ  
は異民族に國語を教へ込むには、こゝからするのが少勞多效の道であると  
考へたからでした。その考が小學國語讀本に極端にあらはれたことは、國  
民が國語を學ぶ上にも、やはりこれが少勞多效の一道であると敬服致しま  
した。

難點とい  
ふは難點  
ならず

讀本の初歩を文章から進むについて、難點とする所は、新字を多く出さな  
ければならないことです。第一步に於て兒童の負擔が重きに過ぎるとい  
ふことです。故に監修官も「文字は徐々に」といつてゐられますが、兒童の事  
情は心配する程のことではありません。讀本を學ぶとはいひますけれど

も「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」の中で、何を學ぶのでせうか。意  
義の通じない點は少しもありますまい。さすれば學ぶ所といつても文字  
のみでせう。新字が六字、負擔は重いやうですが、それは全部文字といふも  
のを一字も知らないものとしての話です。ところが兒童は、いろはがるた  
に於て、新聞の廣告に於て、或は繪雜誌等に於て、親しみのある假名は、決して  
少くありません。ことに兒童は學校に來ることを「字を習ひに來る」と信じ  
きつてゐますから、書き得るといふ學習の實績を責める心さへなく、監修官  
のいはるゝ徐々にと心得てゐれば、文字は決して憂ふるに足らないものと  
思ひます。

先生の勘  
違

唯先生が勘違をなさることがあります。それが恐ろしいのです。とい  
ふのは、兒童は既に家庭に於て他人の言葉を解し、また自分の思想感情を相  
當に發表するまでになつてゐます。そこで、足らないものは文字です。文



字をさへ教へ込めば、國語教育の目的は達せられるとお考へになることです。今一つは兒童は幼弱なものです。之を育てるには、物事をよく分解し、説明して教へなければならぬとお考へになることです。前者の陥る所は文字過重の弊で、讀むことの趣味がこゝで破壊されてしまふことがあります。後者の陥る所は學習の興味が去つてしまふことであり、その理由が何であつても、兒童の學ぼうとする心が去つてしまへば、一年生といふ者は、押しても突いても行くものではありません。

文字過重は我が國語教育の病です。その弊一にこゝに至るかと思ふ程であります。板書した文を、一字々々あらん限りの聲を出して、先生の鞭につれて讀ませてゐる方があります。これが國語の破壊でなくて何でせうか。若し文字と音聲の結合を練習したいのなら、五十音圖によるがよろしい。小學國語讀本卷一の卷頭の文は「サイタ サイタ」サクラ ガ「サイタ」

文字過重

と三聲によむにきまつたものです。それ以外には讀んでならないものです。「サイタ」サイタは喜びに満ちた叫「サクラ ガ」サイタもやはり歎美の心持が強いが、一面には事實を語つてゐるのでもあります。若し之を一字一字讀ませたとしたら、國語の破壊といふ事以外には、何もありません。また文字の練習として、同一文字を幾度か書かせる先生があります。佛の顔も三度といふ諺があるではありませんか。よし同一文字を書かせるとしても、三度位より多くてはいけません。それが人情でせう。試みに同一文字を連続的に書かせて御覽なさい。字體の崩れかけるのは四、五字目からでせう。兒童に命ずることは、常に之を己に命ずる者のあつた場合には、身に引當てる程の思ひやりがなくはなりません。先生はいかなる場合にも暴君であつたり、お爲ごかしの奸邪であつたりしてはなりません。兒童は一體にくどく、説明することはきらいです。櫻の一枝を携へ來

分解説明



つて、これは何ですかなどは、先生がおつしやることだから、黙つて謹聽してゐるものの若し仲間がいつたとしたら、佛然として「馬鹿にするない」といふ所です。「この繪に何か書いてありますか」なども、先生がよくお尋ねになることですが、兒童としては「盲ぢやあるまいし」といひたい感じでせう。「子供と白犬にきまつてらい」といひたい所です。それを一跳如來地に入つて「この櫻の花きれいでせう」と先生がまづながめ入つて御覽なさい。櫻の美しさは説明の出來ない所まで、兒童は見てしまひます。國語の教授は理科とはその志すところがちがひます。そこで「皆さんもこんな美しい櫻の咲いてゐる所を知つてゐるでせう」と聞けば、各自の見たところ、見た様子を語りませう。そこで自分のその生活に立つて挿繪を見させるのです。解し得た繪から文へとつたつて行けば、兒童の心理さながらに、學習を進めることになりませう。私はそれを易行道といふのです。「コイ コイ シロ コ

イ」の挿繪にしても「嬉しさうだね」とやれば、全兒童が承認するは當然です。「も少したてば坊ぢやんはどうするか」「白はどうするだらうか」など問へば、各自生活を語つて「坊ぢやんは白の頭をなでてやる」とか「白は坊ぢやんに飛付く」とか答へるにきまつてゐます。それを廻り道をして「坊ぢやんは太郎さんとしておきませうね」など、齒の浮くやうなことをくどくおつしやいます。私は實につまらないことだと思ひます。それが復習の時に太郎さんといつたのを忘れて、次郎さんとまちがへて兒童に一本取られたり、一本は取られないまでも「先生は出たらめをいふ」など思はれて、知らず識らず信用の落ちて行くやうなことを仕出かしてゐます。太郎さん、正雄さんと、名の明らかに示してあるのは、名のあるやうに取扱ふのがよろしいが、名のないのは小細工をしないで、名のないまゝに單に子供と呼んで取扱へばよろしい。尋一でもつまらない事はつまらないとよく知つてゐます。



ススメ  
ヘイタイ  
ススメ

私が昭和九年四月の中旬宮城縣古川小學校で「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」を取扱ひました一例を記憶から寫してみませう。「サクラ」に比しては、多少易行道に近寄つてゐるかと思ひます。たしか讀方教授の九時間目位のところだとか々ひました。私はまづ兒童と共に讀本を頂きました。——年のせるか、私は新讀本を手にした時、頂きたいやうな氣がしましたから、爾來新讀本はいつも頂いて取扱つてゐます。——「さ一番はじめを開いて下さい」「こゝは」「さくら」次に「こゝは」「しろこい」次はとんで、その次は「お日さま」かういふ風に、順に押し、「ハト ハト」まで行きました。次に「へいたい」の所に歸つて、

「繪をよく見て下さい」

「これは何ですかね」

「へいたいさん」

「よく見て下さい。變だね」

「へいたいさんのおもちや」

「誰が並べたのか」

「坊ちゃん」

「並べておいて何といつたか」

「すすめ すすめ へいたい すすめ」

こゝで私が範唱しては、幾人かにはせました。たしかにいへだしましたから「坊ちゃんのやうにこのへいたいさんに號令をかけるつもりでいつて御覽」といひながら讀本を開いたまゝ、黒板の右方、粉なうけの上に立てました。兒童はしばらく諦視してゐました。間を見て「いつて御覽」といふと、

「すすめ すすめ へいたい すすめ」

といひました。「よし兵隊さんが進むぞ」といひながら、讀本を黒板の左方に



移しました。挿繪の兵隊さんが進んだ體です。兒童は目をまるくしました。

「さ進んだ兵隊さんをもとに戻して御覽」

これには兒童甚だしく當惑したやうでした。私は一段と落着いて

「兵隊さんは行ききりで歸らなくてもよいものかね」

と申しました。古川は第二師團の管區で、かの滿洲事變には幾多の戦死者を出した所です。兵隊さんといふことには、極めて注意が強うございます。兒童は兵隊さんを返す言葉がわからないので、困り入つた様子が見えました。

「をしへてあげようか」

といふと、兒童はうなづきました。

「かへれ かへれ へいたい かへれ」

兒童は可なり大きな聲で復唱しました。「さあ歸るぞ」といつて返さうとしましたが、それでは繪が後退をすることになります。止むを得ず、讀本を裏返しにしました。これで繪は見えないけれども、兵隊さんは前進してをる譯です。黑板の右端に歸り着いた兵隊さんは、讀本が裏返しになつてゐるために、兒童には見えません。そこで

「この兵隊さんを皆さんの方にむけて御覽なさい」

といふと、少し間をおいて、

「まはれ右」

といつたものがありました。私は「よし」と大きく請取つて、讀本をかへして、兒童の方をむけました。それからもう一回前のを繰返しました。「進め進め兵隊進め」歸れ歸れ兵隊歸れ、讀本の挿繪に動作をさせながら、黑板の中間に來た時、



「止めて御覽」

といつたら、多數の兒童は聲を揃へて、

「とまれ とまれ へいたい とまれ」

といひました。それから兒童と共に書きました。

ススメ ススメ

へイタイ

ススメ

私は丹念に兒童の書いたのを見てまはりました。殆ど書けてゐましたので、皆さんは休んでゐなさい。先生が書きますから、見てゐて下さい」といつて筆順の見えるやうに、黒板の上部に、赤のチョークで、

ススメ ススメ

へイタイ

ススメ

と書きました。兒童は靜かに見てゐました。次にはまた兒童と共に書きました。

ススメ ススメ

へイタイ

ススメ

兒童が丹念に書きました。前の書寫に較べると、全體に字の形がよくなつてゐるではありませんか。私は嬉しくてたまりませんでした。後に山崎校長は、「自分の前にゐた子が、最初には「メ」の字を點から書いたが、二度目には正しく「ノ」から書いてゐました。一年を幼弱と見過ぎる所に、尋一教育の缺陷があります」と。至言だと思ひました。

それから讀みの練習をして終りましたが、私は素より嬉しく、兒童も嬉し



さう、參觀の方々も亦嬉しさうでした。板上には同じ文が三つ書いてありますので、三度繰返し讀んでも、一度讀んだ氣持のやうでした。こゝに易行の一道が明らかにあらはれてゐると思ひます。兒童は中々言ふやうにはならないものですが、爲るやうには必ず爲るものでございます。教育が内からとなり、内へとなつて行きましたら、如何に易々たる中に、効果の大なるものが得られるかと思ひます。

尋常一年生を學校生活に慣れさせるが爲に、先生が色々御苦心をなさいます。集合から整容、教室の出入着席の姿勢、擧手、應答の言葉、禮、湯呑場、便所等に關することまで、お世話のやけることばかりであります。けれどもそれ等のことは、一學期中とか二學期乃至三學期中に徐々に出來上つて來べきもので、こゝに際立てて仕上げなければならぬといふことではありません。入學以前の彼等は、いづれも必要といふことの上に學んで來たのです。

## 必要と共

から、必要と結び付いてゐることは、言葉でも動作でも、決してその使用を誤りませんが、必要な場合に教へられたことは、時に笑話の材料となる場合があります。私が下等八級生に入學して、まだ間のない頃のことでしたらう。先生から立禮の作法を教へられて歸つて來たのです。土橋を渡つて、少し行つた處に池があつて、それから私の家までは、三四十間しかないのです。母は私の歸るのを、表に出てまつてゐて下さつたのださうです。土橋の上まで歸つて來た私は、急いで池の端まで來て止りました。そこには市の貝といふ山村の酢賣が、酢の荷を下して、池で手を洗つてゐました。私は立禮の正しき姿勢をして一禮しました。蓋し、今を去る五十五、六年前に、山村の酢賣のちやいがかうした敬禮をうけたことは、空前の事であつたに違ひありません。子供の目にも不思議な程、相好を崩してほめてくれました。私は仕済したりといふ心持で、急いで家に歸ると、表に待つてゐて下さ



つた母は如何にもをかしさをこらへてといふ様子で「これからあの市の貝のぢいさんにはお辭儀をしなくてもよろしい」といはれました。私は稚な心に狐につままれた感じで嫌な思がしました。母は私が可なり大きくなりましてからも「子供の正直さ」とか「導き方が大切だ」といふやうな場合には、よく此の話を話したものでした。故に私は入學當初の兒童の取扱は、なるべく家庭生活を壊さないやうにと努めました。東京高師在職中には筆に口をそれを強調したものでした。この頃尋一の教室に於ける言葉が、著しく家庭的になつたのは、先生の深き御注意からだと思ひます。

先頃静岡の横内小學校に數日ゐりました時、加茂校長が「尋一入學の當初一週間、朝會をわきから見させて置いて第二週目から参加させることにいたしました。が、何等の支障もなく、上級とおなじやうに行じてまゐりました」とかたられました。尋一の入學當初は、教へようしつけようといふところに、

大なる蹉きがあると思ひます。教へることは勿論大切ですが、その裏には育てる温い心がなければなりません。さうした先生の許に於てのみ、學ぶと共によく育つて行くのだと思ひます。

雑記帳一冊は、尋一入學當初の測定器だとお考へになつて、何處から書けとか、かう書けとか、むづかしい事を言はずに、兒童がなすままに任せてみて下さい。その上には個性の影や、家庭教育の傾向や程度などが明らかに現はれて來ると思ひます。教室内の席次は、雑記帳一冊を書き終へた頃に慎重に考慮して定めたがよいかと思ひます。手のかゝらぬ子供は、後方又は左右の側に、手のかゝりさうな子供は、手のかゝらない子供と組合せて、中の側二列の前方に、市松形に配置するがよろしい。即ち手のかゝる子供の周圍には、手のかゝらぬ子供がをり、手のかゝらぬ子供の周圍には、手のかゝる子供がをるといふ様に配置したいと思ひます。さうすれば管理しやす



いといふ上からも、育てやすいといふ上からも極めて都合がよろしい。教室に於ける兒童の配置を見れば、擔任先生のその學級に對する苦心の程度が察せられると思ひます。いろは順や身長順には、苦心を加味する餘地がありません。考へものでせう。

## 教室

教室は靜肅でありたいと思ひます。他から押しつけて靜かにさせるのは、むづかしくもあり、決してよい事とは思ひませぬが、自分が學校に來たわけ——暫く字を習ひに來たと考へさせてもよし——を考へて、その目的を達せんとする自覺から、發動的に靜肅にするのなら少しも悪い事ではありません。いかに稚くても入學する程の子は、さうありたいと思ひます。修行所に騒がしい所はありません。自覺ある者の會する所に、騒がしい所はありません。兒童は集團の喧噪を知つて、集團の靜寂を知りません。この一事が體驗せられるだけでも、學校教育の效果だといつてよいかと思ひま

## 少時の靜坐

す。

先頃三河の新川小學校へ行つた時、靜坐の姿勢を語れといふことで、一通りそれを話しました。すると暫く坐つてみようといふことになつて、私が岡田先生のなさつたやうに「目をつぶつて」そろ／＼目を開けての指揮をやりましたが、私は指揮すると共に、自分もその指揮に従つて、丹念に坐りました。心の一致する時は不思議なもので、四五十人坐してゐるのが、一人の様になつて靜まり切ると、遠くの物音が手に取るやうに聞えて來ました。即ち學校のすぐ前の道を驅抜ける自動車の音と、一町向かふの道を驅けて行く自動車の響とが、明らかに區別が出來ます。すごい程の靜けさを約二十分許りすぎて私は申しました。「皆さんは眞の靜けさといふものを今御體験になつたでせう。これ程の靜けさが、こゝに存在する事も、今が始めての御經驗でせう。そこで問題は教育の事に轉じます。が、物事を明らかに知



るといふ前には、一心を靜かに落着けることが大切です。それは幾人ゐる教室でも、幾百千人にゐる運動場でも、人々の一心が靜かになれば、そこが聖壇聖地となる譯です。今坐したのは約二十分でありましたけれども、この一體験が皆さんの教室教壇に及ぼす影響は實に大なるものがありませうと申しました。その後また新川を訪ひました時、神谷校長が「千八百餘の兒童を運動場に集めて朝會を致します時、あの靜坐のやうな氣持で導くと、石工の鑿の音——奉安殿の土臺石を鑽る——を明らかに聽取ることが出來て、我等も兒童もよい氣持に朝會の少時間を過すことが出來ました」と語られました。尊い經驗だと思ひます。一般に兒童は活動性に富むといつて靜肅を罪惡視する傾がありますのは、兒童の暴性を活動と誤認してゐるのか、兒童を率ゐるについて自分の無力を物語つてゐるのかどちらかでせう。不幸にして生來眞の靜肅を味はう機會を得なかつた者は、必ずそのいづれ

か一つに墮することを免れないでせう。眞の靜肅、それが何から來て、如何に尊く楽しいものであるかは、人間である限り、老若男女すべてが知らねばならぬ問題であります。

初めて尋一を持つ先生は、必ず音聲の不足を語ります。さうして疲勞の甚だしきをかこちます。それは徒口をきくからです。無用のことに氣を揉むからです。それがために却つて子供が氣味悪く思つて寄付かなかつたり、勘違をして、子守か下男の少し上等な位に考へて、つい我儘をするやうなことになるたりします。さうでなくても、育ちの悪い子供は、自分が何であるかといふ位を取りそこなつて、子供の惡癖である、大人なぶりのからかひを取へてする様なことにもなります。かうなつて來ると、饒舌が本で、教育の根本が破壊されてしまふことになります。先生は常に愛敬の心を持つてなるべく沈黙に従ふがよいと思ひます。



名譽心と  
競争心

静肅なる教室を作らうとして、むやみに児童を譽める方があります。譽められたがる中は効力がありますが、その氣の失せると共に、効力がなくなる許りでなく、他の褒貶によつて動く悪い癖をのこします。又よく注意させるがために、或は作業に全力を傾倒させるがために、児童の競争心を利用する方があります。これも又競争に興味のある中は有効ですけれども、回数が増なつて、競争の興味が去ると、無効な許りでなく、内に向くべき教育を外に向ける罪を残します。教育者の行動は須らく米の飯のごとく、取立てた味はなけれど、何處かにいふべからざる味があり、食はなければ死ぬ底のものでなければならぬと思ひます。

内へ内よ  
り

要するに尋一の教室は静肅でありたいと思ひます。むやみに拍手したり、發言を争つたりすることなく、讀むにも一心、聴くにも一心、書くにも一心といふやうに仕向けたいと思ひます。先生の態度が何時も「内へ」何時も「内

より」といふのであつたら、その感化は必ず内へ、内よりとなるものだと思ひます。

掛圖

一年生の國語教授を掛圖によらなければならぬやうに考へる方がありますが、私はあの美しい讀本、彩色した挿繪が、各児童の前に提供せられてゐるので、それを見ればよく視、指頭でさして、確實に觀察させたら、擴大した掛圖をばつと見たよりも、効果が多いと思ひます。殊に讀本の挿繪は全部當代の名家が執筆されたものとうかゞつてゐます。一本の線、一つの點にも、たまらない味を見出します。それは掛圖には得られないかと思ひます。私は讀本の挿繪を、教授の方便物で、文章に附随してゐるものとは考へてゐません。むしろ獨立して、鑑賞せらるゝものかといひたい程です。文は完全體挿繪は部分をあらはした美術品といふ風に思ふのです。そこで掛圖は教授の方便物とかうなりますが、必ずしも之がなくてはならぬといふの



ではなくて、美術品を使ふ方が、一舉兩得の場合かと思ひます。なほ押しつめていふならば、文部省があれだけの原畫を持つてゐて、なぜそれを擴大した掛圖を發行しないかと思ひます。

なほ新讀本が世に出でて、俄かに聲を高めたのはアクセントの問題です。アクセントを教授する注意として、線であらした書物もあつたかと思ひますが、先生が精確なる理解を得る方便としてはよいとしましても、それによつて語つてみようとする、とさつぱり言葉になりません。アクセントは或は線などで表はせないものかとも考へました。アクセント問題は困難な點のあるものと見えて、文部省もその準據すべき處をお示しになりません。勿論教育者が將來來らんとするアクセントの統一について、準備をすることはよい事ですが、先には初等教育界が發音假名に向つて猛然として進んだ覆轍があります。アクセントの矯正を實行問題とするには、多少考

アクセント問題

慮を要するものがありはしないかと思ひます。然らば日々の教壇に立つものは、アクセントを如何に考ふべきか。それは譯もないことです。自分の生きた耳で、兒童の生きた聲をきくことです。さうして如何はしいと感ずる所は矯正すべきです。人は到底それ以上の事は出来るものではありません。よし教室だけでは出来ても、效のあるものではありません。いよいよ我等の動きます時は、國民的の運動にならなければ駄目だと思ひます。尋一の先生は人間として肚のきまつた人でありたいと思ひます。父兄に參觀せられて、頬紅さしたやうになる人は、男でも女でも、一年生の先生として是不適當だと思ひます。しかし頬に紅せぬ先生でも、その場を糊塗して行く——若しありとしたら——先生よりは、新卒の若い生一本の先生がよいでせう。私の常に理想としてゐる一年生の先生は、將に飛ばんとする雀の子を片手に握り得るやうな方でありたいといつてゐますが、言ふ心は



強く握つて死に至らしめず、緩きに過ぎて飛び去らしめせず、手は天地の大法、しかし温みあつて快く、雀の子もその處に安んじ得るやうなといふ義でございます。尋一によき師を得なかつた傷は、尋四位までは癒えないものでございます。尋五になつて稍人心づいて、その非を悟つた時は、時既に遅しといふ事情で、救の手のとゞきかねる場合もあるやうです。尋一に於てよき師につくと否とは、人間の浮沈、一生の問題のやうにも考へられます。

私は四月―昭和十年―も末近き頃ある一年生の教壇に立ちました。七十人に近い大學級でした。その中の四五人は多少かはつた子供かと思ひましたが、大部分は早書寫にも慣れ、應答にも慣れてゐました。私が「ヒノマル ノ ハタ バンザイ バンザイ」を取扱つて、その應用として「ヒラ ヒラ ヒラ ヒノマル ノ ハタ バンザイ バンザイ ヒノマル ノ ハタ」と書いて讀ませてみました。些の支障もなく齊讀していきました。

私はしみじみ思ひました。尋一は一月たゞないうちにかうまでなるものをと。あやまれる教育觀にかき亂される尋一をことの外あはれに思ひました。「皆讀皆書」は尋一に於て最も容易なことのやうです。

尋常二年生以上高等科に至るまでの讀方教授についての心構を、一つにして説いてみようと思ひます。明治の相撲道を復興し、好角家をしてうならせたのは常陸山と梅ヶ谷でした。私がしきりに相撲を見たのもこの時代で、また相撲らしい相撲もこの頃であつたと思ひます。その當時の西の大關梅ヶ谷が「相撲の手は突くか引くかしかない」といつた事を聞いて、至れる人は物を簡單に考へるものだと敬服しました。もし「突くか引くか」の本は「ときいたら梅ヶ谷は必ず「力です」ね」と目を細くして笑つた事と思ひます。國語教授も結局は理會か發表であるが、それが一つ心に取扱はれるのを國語の力といふものだと思ひます。即ち突くか引くかのうまく行く

尋常二年  
生以上



讀む

か行かないのは、力の強弱と修練の如何にあることでせう。  
 讀むといふことについて、私はこゝにやゝ詳しく述べてみようと思ひます。垣内先生は「讀方教授は讀みに始まつて讀みに終る」とおつしやいます。即ち讀方教授は讀み一つだとおつしやるのです。如何にも、讀方の負擔してゐる仕事は、複雑を極めてゐる爲に、往々締りのない教授が行はれてゐる事實をさへ見る程ですが、一切を綜合した所は「讀み」の一つに歸するのだからと思ひます。さうして讀みとなつて音聲にあらはれたのは、引く手極はまつて、はや突きにかはつてゐるのです。それで私は讀みは綴方の一種だと考へてゐるのです。人は、何でもかでも、綴方に引張り込む男だ」といつて笑ひますが、決して奇矯の言を好むものではありません。事實は全くさうなのです。

文章

文章といふものは、作者の心に響くものを言葉によつて表現し、それを文

文章を讀む  
 手續

字によつて記載したものです。響といつてゐるかつたら考とでも、必要とでも、御隨意にお考へ下さつてよろしい。とにかく書かねばならぬもの、それ自體をいふのです。しかし文章を見るのに、單に言葉の書き記されたものとのみ見るのは誤りです。文字は萬人共有の符牒であり、言葉も萬人共有のもので、文章となると、そこには作者の個性があらはれてゐます。個性などといふと、誤解されるおそれがありますから、もつと端的に、文章は作者だといつたがよいでせう。姉崎博士が高山樗牛先生の文集に題して、「文は人なり」といはれたのは、こゝの消息でせう。

さてその文章を讀む場合、即ち讀者の立場から見ると、まづ文字が手がかりであります。それが讀めなくては、萬事休する次第です。次に言葉が手がかりです。それに不可解のものがあれば、是亦萬事休する譯です。次に言葉の關係から、その陰にやどる事實を探るのです。更にその事實の奥に、



作者の所信をうかゞふのです。さうして理會し得た所を音聲に表現するのを普通には読みといつてゐるのです。默讀といふのは音聲の表現を省いた理會までのものをいひ、微音讀は撥にかけないだけで、爪弾といつた恰好のところす。さてかう説明してみると、そこに禪家の所謂言端語端に墮して、その眞を失ふことになるのです。たゞ文章を文字語句事實と切離して考へてはなりません。文字も言葉も作者の尖端で、事實も響も作者自體と考へなければ、文章の眞意義は解せられるものではありません。極端にいへば、文中の一字を書いても、文中の一語一句を書いても、そこに作者を見落してはならないのです。

## 自己を讀む

私はこの邊に來ると、まごついてしまふのです。文字にすら語句にすら、作者を見るといふほどならば、文章を讀むといふことは全く作者に追隨する仕事で作者以上には一步も出られぬことの様になります。それは違ひ

ます。私が約二十年前に讀方教授といふ一書を著した中に「讀むとは自己を讀むなり」と立言したのがそこです。文字言葉も勿論作者の尖端とは見なければなりません。けれどもそれが萬人の共有物である爲に、馬を牛とは讀んではならず、牛を馬とは考へられないのです。ところがその牛とか馬とかいふ言葉によつて、あらはされた物となると、もはや作者の物ではなくて、讀者の生活範圍から得て來た牛又は馬であります。したがつて、牛又は馬について、作者の書かうとしてゐる心の奥の響も、結局讀者の認めたいふその物で、それを作者のものであるといふのはむづかしいと思ひます。私が「自己を讀む」といつたが爲に、非常に批難されたのはこゝです。私は同じ文章でも、作者の心の底を讀取るとは、讀者の修行の程度によつて、淺きも深く、深きも淺く讀むことが生じると思ひます。結局文章を讀んで理會したものといふのは、作者によつて限定せられた範圍に、自己の考を打



読みと話

立てたといつたら、一番眞實に近さうです。即ち讀むといふことは、作者と讀者との共同作業のやうなものと考へたらよいでせう。

讀者が理會し得た所を音讀するといふ場合は、話すと同じものと考へたと思ひます。唯其の異なる所は、話す時には何等他の拘束をうけないが、讀む時には、作者の選定した言葉に従はなければなりません。その場合には「てには」一つちがつても忠實な「讀み」とはいはれません。この事情の差から、讀みと話しとは、自由さが違ひますけれども、修練の結果、それが相接近すべきものであることは、言ふまでもありません。

文樂の淨瑠璃

大阪の文樂座では、人形芝居の一興行が大抵二十五日のやうです。すると太夫は日々同一の淨瑠璃を語つて、二十五日即ち二十五回になる譯です。「よく飽きない事だ」と或人が申しましたら、太夫のいふには、「私は一度も同じ淨瑠璃を語つた事がありません。工夫し工夫して語ると、一日だつて同じ

ものは出来ません。そこに私どもの進歩があるのですといつた」といふことです。國語教育易行道の眞髓を語り盡したもののやうに、私には聞えま

同じ讀み  
はない

す。讀みは一回だつて同一な譯がありません。理會が進み、それにつれて、音聲に表現する創作的の工夫が進むものとしたら、文樂の太夫でなくても、讀みはその都度變つて行くのが當然の事です。この立場に立つて、今の小學校の讀みを考へたら、生氣の乏しい譯も、讀本の讀めない譯も、忽ちにおわかりになりませう。本來易行なるべきものを、殊更に難かしくして、師弟共に惱みぬいてゐるのではありませんか。夫が餘りにも年久しく續いたが爲に、却つて之を説明する理窟様のものが出来たり、それが兒童の本性だと心理學の誤用が生じたりして、脚下の小石に躓いてゐる事に氣のつかない方があるやうに見えます。私は餘りにも馬鹿々々しく、餘りにも情なくて、身



の微力をかへりみる暇なく、こゝに「皆讀皆書」の運動を起さうと考へてゐるのです。

讀振

讀振についてまづ肚をきめて下さい。「全國に讀本を如何に讀ましむべきか」の疑があればこそ、高師附屬小學校の生徒の讀みがレコードに吹込まれて、全國に流布してゐるのです。参考としては、いづれも結構なものでせうが、これを眞似させるとしたら、淨瑠璃以上に難かしいものでせう。讀みは本來聲にはなくて、理會の聲に表現された所にあるのです。理會なき所に「讀み」はありません。「讀み」は生きた聲を生きた耳で聽く所に學ふべき所があると思ひます。肉聲の尊い所です。第一に兒童の生命語——生命を盛込んで使用する口語を假りにかう名づけておきます——で讀ませなければなりません。生命語は之を他に求める事は出来ません。自分に求めるより外に道はありません。おのれに求めた生命語がよし方音に亂され

であるものでありまして、訛がありまして、方音を正し訛を正す前にそれで讀むことは止むを得ない事です。漸次師によつて矯正され、次第に純正に近づくべきものです。言換ふればその土地の言葉、兒童の日常使用してゐる言葉で讀ませるのが第一歩です。なほ極言すれば、讀本の文章をまづ兒童の生命語に近寄せて、讀本といふも、我が生活を語るのと同じものであると考へさせたいのです。唯誤解してはならないのは、火箸を兒童の生命語では「シバシ」といつてゐるから「シバシ」のまゝにしておくといふのではありません。かうした場合は適當に訂正しなければなりません。しかしこんな事實は決して多くあるものではないと思ひます。要するに兒童の有する口語によつて讀ませたいといふのです。兒童の生々した理會によつて讀ませて行きたいのです。

讀癖

讀癖について一言致します。若し輕便なる吹込器があつて、全國兒童の



讀癖といふものを悉くレコードに取つてみたら、如何に國語教育が弛緩してゐるかがよくわかりませう。教室以外の何處にもない國語が、平然として國語教室に使用されてゐます。運動場では、生命語によつて泣いたり笑つたりしてゐる兒童が、讀本にむかふと泣きも笑ひも出来ない言葉で讀んでゐます。いかに因習とはいつても、それが平氣で聞かれるのは、先生もどうかしていらつしやると思ひます。讀みが兒童の言葉をもとにして打立てられなければ、讀むことに力もはいらす、讀む興味も起らず、まして讀みについての創作工夫などは、思ひもよらないことになります。私は餘りに癖のある讀みにあふと、「皆さんが家へ歸つて、おかあさんお菓子を下さい」といふ時の言葉でお讀みなさいと申します。節をつけるのが不自然で、生命語で讀むのが自然ですから、すぐなほります。要するに讀癖は自分のつかつてゐる言葉に自覺を持つてゐないから生じるのです。讀んでも話しても、

聲の力

その言葉が、誰のものかがわからないやうでは、發達する譯がありません。

讀める子供でも、多く聲に力がありません。ない譯です、文字を音聲に翻譯してゐるだけです。理會が基礎になつてゐませんから、自信ある響がありません。私は兒童の讀みを聞いて、略その理會の程度、自信の程度を聽取ることが出来ます。故に讀みを指導するには常に「自分に満足の出来るやうに讀め」と注意しなければなりません。又讀みの速度がむやみに速くて、讀みがたゞ文字の上を滑るに過ぎないものがあります。正しき讀みからみると、一字を誤らず流暢に讀めたとしても、それは大なる缺陷であつて、まづ緩讀を奨励し、次第に眼光紙背に透るやうに矯正しなければなりません。

國民の經典

私は常に讀本は國民の經典だと申してゐます。言ふ心はこれに讀浸つてゐれば、國心がおのづから目覺めて、順良なる國民が育つと思ふからです。



故に讀本の讀めないといふことは、その事以上に私には心苦しく感ずるのです。目覺むべき國心が目覺めない許りでなく、つひには國心に遠ざかると思ふからです。讀書によつて、國心に生きる機會を失ふからです。さうなつて來ると、私は讀本の讀めない理由を探究して、改むべきは改め、工夫すべきは工夫して、それを一掃しなければならぬと存じます。

讀本の讀めないのは、讀みの本質に縁遠き事をしてゐるからです。しかしなほ仔細に考へてみると、殆ど何人にも氣がついてゐないやうなことから、讀めない児童を多く作つてゐる事實があります。それは教授の際に「讀める人」ときいて舉手せしめ、その舉手したものにのみ讀ませてゐることです。さうして讀めない者はそれを聽いて讀めるやうにしようとしてゐます。これは一見合理的のやうに考へられますが、之がためにどれほど讀めない者を多くしてゐるか知れません。私の子供の頃も既にさうであつた

舉手にた  
よる弊

と思ひます。今もその儘に繼續してゐるのだと思ひます。手をさへ舉げなければ讀む責任はない。讀めないといへば讀まなくても、學級の一員として日が暮れて行くといふことは、如何に學級の空氣を弛緩せしめたかと思ひます。人にして緊張を缺いた場合、その成績は決して優良となるものではありません。先生は常に緊張努力を口にしながら、その實際に於ては、之に背反する仕向け方をしてゐたのです。故に確かに讀める者といつたら級中の十數名に止まり、他は七八分の讀み、五六分の讀み、中には二三分の讀みも生じて、學級は全くどうにもならない姿となつてしまつたのです。たゞ讀めないだけならばまだよろしい。先生が稱讚をむやみに振撒いて、この情氣を挽回しようといつとめますから、優等生は自負心を起して、劣等兒を愚弄し、劣等兒は自棄心を起して、意地にも努めようとしません。終には先生も優を賞するに言なく、劣をはげますに法なきに至つて、雙方から不信



任を招いてゐる事實が多く、少しく肚の据わらぬ先生の教室は、總べてこの通りだといつてよい程です。親しき友の中にも、劣等生は御し易いが優等生のこぢれたのになると、始末に追へないといつてこぼす者があります。それは自らの脚下に問題が潜んでゐるのを知らないのです。

私も數年前までは、舉手を傳つて讀ませてをりました。さうはしてゐながら時々はこの多數の讀めないものを、如何にして救はうかと考へないでもなかつたのですが、方法としては何とも工夫が付きませんでした。或時さる學校で、尋五に文天祥を取扱つたことがありました。例によつて「讀める人」と問うた所が、四人しか手を挙げませんでした。私はその時「馬鹿にするな」と感じました。そこで「よし手を挙げた者には讀ませない。讀めないことは覺悟で舉手しなかつた者に讀ませる」と宣言しました。多少室内に動搖の色が見えましたけれども、後の第二列目を、左の端から順繰りに右に讀

ませてみました。もとより一人も手を挙げてゐなかつたのですから、讀めないのは當然です。しかし八九分七八分には讀めて、今一步といふ努力が足りないのだといふことを見ました。緊張を缺いてゐるのだと氣がつきました。そこで私の警策は飛びました。「それだけに讀める者が、何故もう一步といふ處で力をぬくか。何でさういふ見苦しい生き方をするか。明日はもう一度、今讀んだ者に讀ませる。努力したまへ」とやりました。蓋しこの學級は出來ないのでありますが、八九分讀みの弛緩状態に満足してゐるものと見えました。その日は面白くもなく終つて、さてその翌日の教室の空氣には驚きました。昨日の列を右から左へ讀ませました。すつきりした讀みでした。なほ他にも一列順繰りに讀ませました。いづれ澄切つた讀みでした。私は嬉しくなつて「一夜の努力の效を知りなさいよ。緊張した生活に入らなくては駄目よ」と申しました。児童も讀めなくての



警策はつらいが讀めて打たれるのは快いものと見えます。皆にこくし  
てゐました。これが快馬の一鞭といふのでせう。この日の座談會は順繰  
に讀ます事で持切つて頗る名案だといふ事になりました。名づけて教授  
六神丸といはうといふ事になりました。言ふ心は、小兒のためには起死回  
生の妙藥だといふ義です。私がこの事に氣付いてから、同志には之を傳へ  
て、殆ど全部試みてもらひましたが、全校として不思議な成績をあけたのが  
愛知縣の新川小學校です。こゝでは殆ど「皆讀」の實が擧つてゐると思ひま  
す。高等科の兒童が、歴史の教科書を一人残らず讀んでのけるあたりは、ま  
ことに胸がすくやうです。東京市の荒川小學校の鈴木佑治君は、兒童の持  
つてゐる教科書の、いやしくも文字で表現してあるものは、書方手本に至る  
まで、まづ順繰に讀んでから、次の作業にかゝるやうにしてゐます。「教科書  
が全部讀める位は、譯のないことですね」といつてゐます。

一學期に  
して皆讀に

若し此の事一つ、全國の先生方に御承認を得たら、「皆讀皆書」運動の半は成  
功する譯です。これ程易行の一道はないと思ひますので、さらに一例を擧  
げて、これが實行を全國に求めたいと思ひます。事は東北地方のさる學校  
に於ける事實です。尋四に競馬をと望まれて、三日間の豫定で、私は壇に立  
ちました。何處も同じ習ひとして、後方三列は優等兒と中等兒、その前の一列  
は優中劣混在地帯。最前列は劣等兒、その次も略之に類したものと見まし  
た。四十八人の手頃な學級ですが、擧手を傳ふ教授で行けば、これ位の劣等  
兒の出来るのはむしろ上等の部です。大都市にでも、これ以上の所がない  
とはいはれません。御承知のやうに「競馬」は八段になつてゐます。一人一  
段づつ讀むやうにと命じて、前から三列目の右端の兒童を指しました。さ  
うして、つと左端まで讀ませてみますと、優が三人、中が二人、劣が三人、ま  
した。優中は譯もありませんが、劣の三人には聊か困りました。しかし一



つの仕事を師弟の二人してする氣で、やつと各一段づつ讀ませました。讀めない兒童が苦しげな顔をするかと見ると、師弟二人がかりて讀んでも、却つて喜んでゐるではありませんか。私は之に力を得ました。「三日目の一番おしまひの讀みを、この六人に讀ませるからしつかりやつておいてくれよ」と申し渡しました。三日間にはその第三列だけ除いて、一段づつの順繰讀みを何回か繰返しました。全級一日々々讀聲の冴えて來るのを感じました。三日目に、第一回は同着、第二回目は勝負なし。それに信作方の人々が「あなた方の村が勝つたのです」といつたのは何故か」といふ問にも、耕造方の人も耕造を「如何にも見上げた心掛だ」といつてゐる。信作方の人々も「耕造さんの心掛は實に見上げたものです」といつてゐる。一體見上げた心掛とは何をいふのかね」といふ高級な問にも、明確に答へ得るまでになつて、私も教へ甲斐のあつたやうに感じました。さて前約のやうに、前から三列目

の左から讀ませてみると、中は優に、劣は中の讀みに達してゐました。殊に嬉しかつたのは、八人揃つて聲に力の出來たことでした。讀みに自信の出來たことでした。そこで座談會の時に、私はこの學級ならば數週にして、一人残らず讀めるやうにして見せると申したことでした。私はこの時から皆讀皆書の祈願が動きはじめたかと思ひます。

私は今日の學級教授に、頗る飽足らなく思ふ所があります。個性を重ずる方は、學級の集團生活を無視し、集團生活を重視する方は、個性を無視する傾があります。私は一即多といふ考が一面の考で、多即一といふ考が、また一面の考でなければならぬと思ひます。一即多とは、教師の一聲が五十六十の級全員の各自に響くと見るもので、多即一とは一問題を定めて、それを級全員で考へる類をいふのです。前の場合は發言者が先生であつても、級の一員であつても、それを自己に落して傾聴し、自分で自分を育てるのです。

多一即多  
一即多



後の場合は、多数の意見のうち、先生が之をと選定して——先生から問題を與へられる時も——下さつて、級の問題となつた場合で、級の問題とするに於いての手續は、先生が取つて下さるのです。その場合には、自分の問題をすてて、極力之を攻究する類をいふのです。級の問題とする手續とは、問題にしたい兒童の答を得た時には、私は「聞えたかね」といつて、全級の注意を喚起します。それに應じないものがあつた場合には、さらに注意を與へて、その者の爲に私が問題を復唱します。さうして級全員に徹底させるやうに努めます。舉手を傳ふ教授には、多くこの注意が缺けますので、知らず識らず遅進兒を作るやうなことになるのです。

聽く

聽くは音讀談話に附隨するもののやうでありますけれども、その實は音讀にも先行し談話にも先行したものです。國語教育本來の根本問題で、これなきところには音讀も談話もありません。尋一の入學兒童は入學當時

既に三、四千語を有するといふのですが、之を會得したもとの力は、聽くといふ事たゞ一つです。聽いてその事柄を解し、話者の心をまで聽取るのは、文章を讀んでその事柄を解し、作者の心をまで讀取ると同一であります。そこで國語教育の易行道は、文章の讀みからはいつて、——聽く力を利用して——文章の概意を掴ませ、求むる所を内に定めて、語句文字の末梢に及ばうといふのです。そこが同じ語學でも、外國語を學ぶのと、國民が國語を修得するのとは、相違の存する譯なのです。

さて小學國語讀本の既刊五卷の中に、その學年相當の兒童に聽かせて、聽取れないものがどれほどあるでせうか。尋一用の卷一は、兒童の實力以下のものです。卷二、卷三、卷四は、實力相當のものです。一課といへども、兒童に不可解のものは無からうと思ひます。先生が讀取つてゐなざる程に至らないのは當然です。若しそれを注込まうとなさるのだつたら徒勞です。



要は兒童の聽取つてゐるものを是正し、——誤あらば——それを文章の上  
に讀取らせるやうにしたら、自覺を高めつゝ、聽く力も強くなり、讀む力も進  
み、つひにはそれが融合一致して、相倚り相扶けて、入學以前の兒童の國語學  
習と略同一様に國語の力が進んで行くと思ひます。

教師の讀  
つたものと  
兒童の讀  
つたものと

こゝに御注意までに申し上げて置きます。教師の讀取つたものは、勿論  
兒童のそれよりも高いものですが、それを兒童に強ひては百害あつて一利  
もありません。しかしそれを兒童の理會の上に載せてみる事は、兒童の讀  
取る力をすゝめる上に大切なことです。餘談ですが、兒童の讀取つたもの  
を、先生がお聽きになるといふことも、決して無用のことではありません。  
先生も幾十年か以前に通つて來た路ではありますが、年月を経るにつれて、  
十歳前後の心持といふものを忘れてたり、違つて考へたりしてゐる事が少く  
ありません。まして環境が違ひ、よし環境は違はなくても、時間に隔りがあ

聽く心

つて、社會の生活様式が同一ではありませんから、自ら考へ方もちがふのです。  
かうした兒童の讀取つたものを聽くのは、先生が文章をお讀みになる爲に  
も、参考になるし、兒童の讀方を指導なさるには、有力なる資料となると思ひ  
ます。

私が尋一の教室を靜肅にと申しましたのは、聽く心を澄ませたいからで  
す。自ら發する拍手以外の教へられた拍手を禁じたいと申しましたのも  
同じ考からです。發言を争ふ傾や、思考の速きを競ふ様な風をなくしたい  
といふのも、聽き入る心を亂す場合が多いからです。まして述べてゐる友  
の言をよく聽かないで騒ぐなどは、教育上いかなる點から見ても、許すべか  
らざるものです。したがつて誤讀を指摘させたり、讀振や話振の批評をさ  
せたりすることも、學ぶ態度でありませぬ。讀むものは讀む一心、その本質  
に亂れを生じないやうにと努め、話すものは話す一心、その本質に亂れを生



じないやうにと努め、聴く者は聴く一心、これも亦その本質に亂れを生じないやうにと努めさせたいのです。一心に聴く態度と批評する態度とは、同一でありません。これを同時に課した場合には、意識がさけて、二兎を追ふ者の愚に陥ることがあります。私は誤讀訂正や批評は、教師がして注意すべき所を知らせるがよいと思ひます。

書く

書くは文字に關する行的方面に屬すること、その機關となるものは主に手です。文字は見ても記憶が出来ませんが、手のはたらきに訴へた場合の記憶が確實です。私は常に書かせなければ、書くことは伸びないといつてゐます。言ふ心は、當代の讀方教授、綴方教授が書くことをなほざりにするのを慨歎してのことです。極言すれば、兒童の書けない罪は、書かせない教師にあるといふのです。

さて一口に書くとはいつても、梅ヶ谷の言で、これにも突きと引きとが

あります。突きは綴方、引きは書取でせう。讀本の全文を書かせたり、優良文を寫させたりすることは、その中間に位するものともいへませう。讀む意もあり、綴る意もあり、文字の運用に熟達する義もあります。故に易行道では書くことを重視するのでございます。何としても駄問駄答——若しありとしたら——を廢して讀むなり、話すなり、聴くなり、書くなり、綴るなりの行に立たせたいと思ひます。私には易行に立つた初等教育界の國語教育が、あまりにも明るく見えます。なつかしい世界と見えて仕様がありません。

讀本

讀本は讀方の爲に作られた書物です。けれども之を書くことから考へると、讀むと書く、綴るとの、一石三鳥の資料のやうにも思はれます。さらに綴るといふことから考へると、綴るについての工夫、表現の諸法則、假名づかひ、送り假名、句讀點等に至るまで、その範を示すものは讀本です。話すこ



とからいつても、之によつて工夫さるべきものが多からうし、聴くことと組合せて、文字の練習でも、復文でも、文の深部の研究でもさせたら、その方法は殆ど無盡蔵だと思ひます。かう見て來ると、讀本は國語教育の中心をなすもので、國語科全體の教科書と見ることが出來ませう。國語教育の易行道と共に、讀本の研究は今後いよく、重要性を高める譯です。

御親閱

御親閱はまことに前代未聞のことでありました。昭和九年四月三日、全國小學教育者の代表三萬五千人に對し、畏くも我が天皇陛下には、宮城前の大廣場に於て御親閱あらせられ、かつ勅語をも賜はりました。

國民道德ヲ振作シ以テ國運ノ隆昌ヲ致スハ其ノ淵源スル

所實ニ小學教育ニ在リ事ニ其ノ局ニ當ルモノ夙夜奮勵努

力セヨ

私は之を拜讀して、特に、實に小學教育にありと仰せられたる大御言葉に感激致しました。小學教育者が之に對していかに應へ奉るべきかの動きをひそかに注意して視ました。地方では種々記念事業を計畫したところもあります。その一として既に小學教師の制服を一定してゐる所もあります。教員互助法を定めて、着々實行してゐるところもあります。私はその當時ある地方で記念事業に關する話を聞きましたから、私は私の立場として、所見を申し述べておきました。畏くも天皇陛下が、全國の小學教育者に、「夙夜奮勵努力せよ」と仰せられたのは、日々の兒童教育、日々の教壇を正しくふめと仰せられたのではありますまいか。聖旨に應へ奉る主旨は、之を第一としなければなりませんまいと申したことでした。なほ今日の小學教育は大いに改良すべき點がありませう。一教科の國語にしても、果してこれでよいのだらうかと思ひます。かく考へ來る時甚だ心細い感じのするこ



と許りのやうです。記念事業は、御親闕の年を思ひ起すに足るだけのことにして、日々の教壇、日々の教育に全力を注がなければなりません。かく話した後には私は七里和尚の記念碑について、語つたことでした。

七  
里  
恒  
順  
師

九州博多の萬行寺は眞宗の大寺院です。先代は七里恒順師、私のお尋ねした大正十一年はお子様の芝順師が御住職でありました。私を案内してくれたのは、故立石仙六氏で、芝順師から恒順師のことをうかゞつての歸りに、立石君がしみじみとして話してくれました。「君と居たあの部屋の前にあつた沓脱石を見たか」「いゝや、あれが名高い記念碑の沓脱石といふのだよ」「さういはれて見れば、あの廊下を通る人々が、皆會釋をしたやうだつたね」「さうだよ。萬行寺の門徒で、あの沓脱石に禮をしない者はないよ」「一體それはどういふ譯か」「恒順師が病の床につかれていよく、今度は御本復がむづかしからうといふ事になつた。五百の弟子共は取る物も取り敢へず、萬行寺

に馳せつけた。その中誰言ふとなく、師匠のために記念碑を立てようではないかといふことになつた。氣の早い者は、早速石屋を呼んで、事の旨を含め、石材を運ばせて、文字を鑽込むばかりにした。するとまた誰言ふとなく、折角これまでにしたのだから、御存命中に、この事を師匠のお耳に入れておいたがよいではないかといふ事になつた。そこで高足の誰かが、師の枕邊に行つて、その事を申し上げると、師は手を左右に振つて、止せとの意を示された。高足は案に相違して、「お氣に入りますか」といふと、師はうなづかれた。暫くしていともかすかなお聲で、「私の記念碑は五百の弟子の頭の中に立ててある筈だ」とおつしやつた。そこで高足は、「でもあの石材はどう致しませうか」といふと、「ちやうどその沓脱石によい。ほしい」と思つてゐた所だ」とおつしやつたので、それがあの沓脱石になつたといふのさ」と。長長と話してくれました。至れる人のお言葉といふものは、違つたものだと



思ひました。私は何處でもこの話を致しまして御親閲の記念碑は小學生の頭の中にお立て下さるやうにと願つて來たのでした。今は早御親閲の一周年も終りました。「夙夜奮勵努力せよ」との御言葉を體しての結果も着々あらはれてゐる事と思ひます。

教式

教式について今は説くべき時が來たかと思ひます。教式といへば他から拘束するもののやうに考へて随分批難なされる方がありますが、他人に強ひる場合には批難があると致しまして、私が之を行ひます場合は、他の何人にも關係することではありません。私はさうした氣持で之を説くので、すから御覽下さる方もその心持でお読み下さるやうに願ひます。

私は最初にその日取扱ふべき教材を読ませます。次に読み得た所を語りあはせて、けふの學習の方向を知らせます。次に私が読みます。次に今日の學習の手掛りとなるべき語句を書かせます。次に書いた語句を讀ま

せします。次にその語句を取扱つて、今日の學習をまとめます。最後に學習し得たことによつて、教材を読ませます。左に列記してみますと、

- 一 讀む
- 二 話しあひ
- 三 讀む(教師)
- 四 書く
- 五 讀む(板書事項)
- 六 わけ
- 七 讀む

となります。私がいつもこの順序に従つて指導を致しますので、芦田式教法などいふ方がありますし、變化が七つになつてゐますので、七變化の教式などいふ方があります。中には殊更に七變化などいふ方もあります。私



でさへ金毛九尾を聯想致します。これは言葉の戯れといふもので、眞面目な場合には使用せぬものです。蓋したちのわるい揶揄といふものでせう。さて一々に説明の要もないやうですが、私がなぜこの教式をとつてゐるかといふ考を明らかにするために、一通り申述べてみませう。

一の読み

一の読みは私が育てた子供ならば、殆ど誰でも読みますが、読みのよく伸びてゐない學級では、最初の一回は教師が読んでもよし、優良兒が読んでもよいことにしてゐます。二回目からは順繰りに読むやうにしたいと思ひます。読みの回数は、読みの力と學年の上下及び教材によつて、多くも少し、少くもするものですが、普通は二三回といふ所がよいと思ひます。この読みは教室では最初のもので、理會も浅いと見なければなりません。それでも読むといふ以上は、その浅い理會を音聲に表現する心持がなければなりません。そこで私はその読みを聞いて、その読む力を考へ、徐ろに教授をすゝめてまゐります。

てまゐります。

この數回の読みが、學級の多を一にまとめる働きをするものです。各兒童は家庭に於て、多少の豫習をして來てゐるものと見るべきです。よしその前日にはしなかつたとしても、新しい讀本を手にした時から、目次も見ず、繪も見ず、文章の何處をも讀んでみないものは、蓋し一人もあるまいと存じます。その場合よし自分は讀まないとしても、過去に於ける讀本に對する種々の經驗が思ひあはされて、そこに學習の動機が高まつて來るのだと思ひます。勿論よく豫習して來た兒童が、深き興味を感じ、豫習を怠つた兒童が、輕き悔悟を感じるのなども、第一の読みが持つてゐる教育的價值だと思ひます。

自由讀

第一の読みは自由讀を持つて來る方があります。自由讀は騒々しくて、一寸目には全級活動してゐるやうに見えますが、その實は讀める者だけが



読んで讀めない者は結局讀んでゐないので。言換へれば讀む要なき者が讀んで讀む要ある者は讀まないといふことになるのです。これがために教室内の空氣が靜寂を缺いて來るのは、大なる損失だと思ひます。私はむしろ優等兒に讀ませて、劣等兒には一心に聽かせるやうにしたらよいと思ひます。がやく／＼した、景氣のよささうな事をするよりも、しんみりとした修行所らしい氣分が私には望ましいのです。

二の話しあひは讀み得たところを語りあはせるのですが、讀めない者——若しありとしたら——は聽き得たところを語らせてもよろしい。とにかくこの課には何が書いてあつて、作者の狙つてゐる所はこゝらしいと、大凡の見當をつけさせるのです。到底半知半不知とまでは進まなくても、大體の明かりが立てばよいのです。私はつい近頃まで、大體の明かりを立てることに腐心しましたが、問を工夫して事實の要所々々を押へていけば、大

二の話し  
あひ

體の明かりはその事によつて見えて來るものです。たゞ注意を要することは、こゝで事實に深入りをするに、次に進むことが出來なくなります。三四問であつさり片付けて、而も讀んだところと相俟つて、大要を掴ませることが肝要であります。私の七變化によつて修行にはけんであるて下さる方は、こゝが非常に困難だといつていらつしやいます。

三の讀みは私は必ず壇下に下りて讀むさうです。これを發見して下さつたのは、青山廣志君です。「何故壇から下りるか」と青山君に聞かれました時、私は別に故意にしてゐるのではないから、取立てて答へる程のこともないが、「何だか讀ませてもらふといふやうな氣分です」と答へました。青山君が「讀ませてもらふはよい」と大層ほめてくれました。兒童も師や仲間の前に文を讀むのは嬉しからうし、私も兒童の前に文を讀むのは楽しいのです。恰も求道の友が相會して、道を語りあふやうな怡悅を感ずるのです。

三の讀み

四讀 方